

# 北朝時代的多佛名石刻

——關於懺悔和稱名信仰——

## 倉本尚德

本論文主要介紹了幾種北朝時代具有代表性的多佛名石刻銘文以及調查石刻佛名所依據的經典，從而揭示出北朝時代多種多樣的佛名信仰形態。從地域上看，山西河南兩省是多佛名造像碑的主要分布地；從年代上看，自東西魏朝分裂後，多佛名造像碑的數量開始增多。佛名信仰的主要崇奉對象是過去七佛、定光、多寶、釋迦、彌勒（過去、現在、未來三世佛系列）和無量壽佛（阿彌陀佛）、觀音、勢至菩薩、以及六方佛、十方佛、十六王子（十方諸佛系列）。但十方諸佛系列的具體佛名是各種各樣的，沒有明確的規則。

其中，有的石刻佛名或菩薩名的出處是實踐性強且跟懺悔有關的中國撰述經典——例如『大通方廣經』、『菩薩瓔珞本業經』等々。關於供養者的身分，分別有「齋主」、「懺悔主」、「行道主」這樣的注明。這些事實表明，在僧尼的指導下，道俗共同參與了懺悔和授菩薩戒的儀式。

淨土教的阿彌陀佛念佛信仰，經常被用來和三階教的普佛信仰作對比。雖然兩者的思想有明顯的差異，但在北朝時代的多佛名信仰的特徵中，可以同時找到兩方思想的萌芽。

# 北朝時代の多佛名石刻

——懺悔・稱名信仰と關連して——

倉本尚徳

はじめに

中國において、佛名を唱え禮拜することで懺悔滅罪する儀禮が南北朝時代頃から盛んに行われ始めた。日本においても中國からの影響を受け、古代から現代に至るまで佛名會が執り行われてきた。佛名會の所依經典の一つであった『佛名經』については井ノ口泰淳氏や鹽入良道氏の詳細な論考があり、日本の七寺で發見された十六卷『佛名經』についても研究成果がまとめられている。<sup>1)</sup>

『佛名經』以外にも多佛名を唱えることによる懺悔の功德を説く經典は少なからず存在する。特に南北朝時代には佛名を列記する形式の經典が盛んに翻譯、または他の經から抄出され、作成された。鹽入氏作成の表を參考にしつつ、<sup>2)</sup>現存する經録で古いもの二部、すなわち梁の僧祐『出三藏記集』と隋の法經等『衆經目錄』から佛名經典と推測されるものを抽出したものが表一である。氏が指摘されているように、南北朝時代の佛名經は、異譯や諸經の抜粹が多く、<sup>3)</sup>

表一 『僧祐録』、『法經録』の佛名經典類（七佛關係經典除く）

譯者	經名	經録名 (大正藏該當箇所)	大正藏經 典番号
竺法護	賢劫經七卷	僧祐録7b	425
竺法護	滅十方冥經一卷	僧祐録8a	435
竺法護	諸方佛名經一卷	僧祐録9a	缺
竺法護	十方佛名一卷	僧祐録9a	缺
竺法護	百佛名一卷	僧祐録9a	缺
竺法護	決定毘尼經一卷	僧祐録12a	325
曇無蘭	賢劫千佛名經一卷	僧祐録10b	缺
鳩摩羅什	新賢劫經七卷	僧祐録10b	缺
鳩摩羅什	稱揚諸佛功德經三卷	僧祐録11a	缺
鳩摩羅什	十住（毘婆沙）論十卷 易行品	僧祐録11a	1521
曇無讖	悲華經十卷	僧祐録11b	157
求那跋陀羅	現在佛名經三卷（麗本なし）	僧祐録13a	缺
失譯（涼土異經）	賢劫五百佛（名經）一卷	僧祐録19a	缺
失譯（抄出？）	諸經佛名二卷	僧祐録21c	缺
置良耶舍	觀藥王藥上二菩薩經一卷	僧祐録22b	1161
抄出	有稱十方佛名得多福經一卷（抄）	僧祐録22b	缺
失譯	三千佛名經一卷	僧祐録22b	缺
失譯	千佛因緣經一卷	僧祐録22b	426
抄出	稱揚諸佛功德經一卷（抄三卷稱揚佛功德經）	僧祐録22b	缺
抄出	過去五十三佛名（經）一卷（出藥王藥上觀、亦出如來藏經）	僧祐録22b	缺
失譯	五十三佛名經一卷	僧祐録22b	缺
抄出	三十五佛名經一卷（出決定毘尼經）	僧祐録22b	缺
失譯	八部佛名經一卷	僧祐録22b	缺
失譯	十方佛名經一卷	僧祐録22b	缺
失譯	賢劫千佛名經一卷（唯有佛名、與曇無蘭所出四諦經千佛名異）	僧祐録22b	缺
失譯	稱揚百七十佛名經一卷	僧祐録22b	缺
抄出	德內豐嚴王佛名經一卷（抄）	僧祐録22b	缺
失譯	南方佛名經一卷	僧祐録22b	缺
失譯	滅罪得福佛名經一卷	僧祐録22b	缺
抄出	觀世音求十方佛各爲受記經一卷（抄悲華經）	僧祐録22b	缺
失譯	賢劫五百佛名（經）一卷	僧祐録32b	缺
失譯	現在十方佛名經一卷	僧祐録32b	缺
失譯	過去諸佛名（經）一卷	僧祐録32b	缺
失譯	千五百佛名（經）一卷	僧祐録32c	缺
失譯	三千佛名經一卷	僧祐録32c	缺
失譯	五千七百佛名經一卷	僧祐録32c	缺
菩提流支	佛名經十二卷	法經録115a	440
失譯	十吉祥經一卷	法經録121a	432
抄出	佛名經一卷（出華嚴經）	法經録123b	缺
諸經所出	受持佛名不墮惡趣經一卷	法經録125a	缺
諸經所出	佛名經十卷	法經録125a	缺
諸經所出	佛名經一部三卷	法經録125a	缺
諸經所出	十方佛名經一部二卷	法經録125b	缺
諸經所出	三世三千佛名一卷	法經録125b	缺
諸經所出	十方佛名功德經一卷	法經録125b	缺
諸經所出	五百七十佛名一卷	法經録125b	缺
諸經所出	千佛名一卷	法經録125b	缺
諸經所出	現在千佛名一卷	法經録125b	447？
諸經所出	過去千佛名一卷	法經録125b	446？
諸經所出	當來星宿劫千佛名一卷	法經録125b	448？
諸經所出	同號佛名一卷	法經録125b	缺
諸經所出	十方佛神呪經一卷	法經録125c	缺
僞撰	大通方廣經三卷	法經録126b	2871
僞撰	十方佛決狐疑經一卷	法經録126c	缺
僞撰	八方根原八十六佛名經一卷	法經録126c	缺
僞撰	普賢菩薩說（此）證明經一卷	法經録126c	2879

殆んどが極く短い一巻本であるという特徴を有し、これらが實際の讀誦に適したものととして流布したことを裏付けるだろう。

これだけ多くの佛名經典が南北朝時代に翻譯、撰述、あるいは經典から抄出された背景としては、當時における稱名信仰の盛行が豫想できる。その流行状況を明らかにする一つの手段として、造像碑や石窟に刻まれた佛名に着目するという方法が考えられる。これらの石刻資料は紀年や像の供養者名を有するものが多く、制作地についてもある程度特定できるといふ長所があり、傳世文獻史料からだけでは明らかにできない、より具體的な使用状況に迫ることが可能であろう。

石刻佛名の研究状況について、敦煌などの比較的有名な石窟に關しては近年研究が進められ着實に成果があげられている。<sup>4</sup>しかし、あまり知られていない石窟や、單立の造像碑に刻まれた佛名については看過されており、未紹介の貴重な資料も少なからずある。そこで本稿では、多くの佛・菩薩名の刻まれた摩崖・石窟や單立造像碑（本稿では多佛名石刻と便宜的に稱する）のうち特に注目すべき諸事例を紹介し、その佛名の典據となる經典を解明しつつ、北朝時代の佛名信仰の特色を明らかにすることを第一の目的とする。特に、釋迦・彌勒・觀音などの有名なものではなく、あまり知られていない佛名の方に重点を置いて考察する。また、その検討の結果を踏まえつつ、隋代の佛名信仰への展開についても少し言及してみたい。

## 第一節 主な多佛名とその信仰

まず、經典中に説かれる多佛名について行論に關わる範圍で概観しておきたい。多佛には大きく分けて過去・現在・未來の三世の時間的な廣がりを表すものと、四方四維上下の十方の空間的な廣がりを表すものがある。代表的なものに關しては鹽入氏が諸テキスト間の佛名の異同などに着目され詳論されているが、筆者は佛名の禮拜や造像など實踐面に重きを置いて解説してみたい。

①過去七佛……過去七佛は、釋迦以前に成道した六佛に釋迦を加えた七佛である。これには、大きく分けて、『長阿含經』や『觀佛三昧海經』念七佛品などの「毘婆尸佛」、「尸棄佛」、「毘舍婆佛」、「拘樓孫佛」、「拘那含佛」、「迦葉佛」、「釋迦牟尼佛」という系統と、『七佛八菩薩陀羅尼神呪經』などの「維衛佛」、「式佛」、「隨葉佛」、「拘留秦佛」、「拘那含牟尼佛」、「迦葉佛」、「釋迦牟尼佛」との二系統あることが知られている。造像銘においてもこの七佛名を刻んでいるものは數多い。ただし造像銘では、北涼石塔をはじめとして初期密教的色彩を有する經典にもとづく後者の系統が多く採用されているのは留意すべきで、これは、過去七佛名が單に過去から現在そして未來へという三世にわたる法燈の繼承を表すというだけでなく、七佛の稱名が病氣や災難の除去に効果があるという現世利益的信仰が流布していたことと關係があるだろう。六朝隋唐期成立の複數の偽經にこの信仰がみられる。例えば、『普賢菩薩說證明經』には、六方の九佛の名號を唱えることで、横死や八難を免れることを述べるのに續き、七佛の名號を誦すことで病氣や様々や困難が消滅するといっている<sup>6</sup>。また偽經『護身命經』にも、苦厄や病痛があるなら七佛の名號を唱え

るように述べている。<sup>7)</sup>同じく偽經『救疾經』にも、法師を請い百日の齋を行い、その間、七佛の名號や金剛蜜迹、無量壽佛を禮拜し、行道懺悔し、この經を寫すことで病氣が治癒するとしている。<sup>8)</sup>沮渠京聲譯『治禪病祕要法』においても、坐禪に際し、鬼神によって惑亂された時、七佛・彌勒菩薩の名を唱え、數息觀を行じ波羅提木叉を誦すことで惡鬼を調伏できるとしている。<sup>9)</sup>七佛は諸々の懺法にもとりこまれ、『國清百錄』卷一「請觀世音懺法」には「一心頂禮本師釋迦牟尼世尊。一心頂禮西方無量壽世尊。一心頂禮七佛世尊。」[T46:795b]とある。『大方等陀羅尼經』では過去七佛に無量壽佛、過去雷音王佛、祕法藏佛を加えた十佛の前で至心に懺悔すれば九十二億生死の罪が滅するといふ。<sup>10)</sup>以上のように七佛の名號を唱え禮拜することで病氣や災難から逃れ滅罪することができるという信仰が六朝時代に廣範に流布していたことが推察される。

②三十五佛・・・三十五佛の名は竺法護譯『決定毘尼經』にみえ、五無間罪などを犯した時、三十五佛の前で至心に懺悔するように述べている。<sup>11)</sup>『觀虛空藏菩薩經』にも滅罪するには十方佛を禮拜し三十五佛・虛空藏菩薩の名をとなえよとある。<sup>12)</sup>『治禪病祕要法』にも、犯戒による禪病の治癒に、釋迦佛↓七佛↓三十五佛と順に念ずべしとある。<sup>13)</sup>三十五佛が懺悔と非常に関わりの深い佛であつたことがわかる。

③五十三佛・・・五十三佛は『觀藥王藥上二菩薩經』にみえる過去佛であり、その名を聞けば萬億阿僧祇劫も惡道に墮ちず、唱えれば生まれかわつた先で常に十方諸佛にあうことができ、至心に敬禮すれば、四重・五逆・大乘を誇るなどの重罪を除滅できるという。<sup>14)</sup>釋迦も遠い過去世において、妙光佛のもと、この佛名を聞き、人に教え、その人がまた他人に教え最後には三千人になり、皆ともにこの佛名を誦し敬禮した。その功德によって無數億劫の生死の罪を超越し、初めの千人は過去千佛となり、次の千人は賢劫千佛となり、最後の千人は未來の千佛となるという。十方

現在諸佛も過去世にこの佛名を聞いた故に成佛した。<sup>15</sup> また四重・五逆・十惡や謗法の重罪を除滅するには、藥王藥上二菩薩呪を誦し、十方佛、過去七佛、五十三佛、賢劫千佛、三十五佛を敬禮し、その後、十方無量一切諸佛を遍禮すべしという。<sup>16</sup> 慧重は隋の仁壽年間、舍利を隆州禪寂寺に送り、齋を設けたところ、様々な靈瑞があつたが、再び都に歸つて後、禪定と懺悔を専ら修すようになり、晝夜十二時五十三佛を禮し、それ以外の時は跏坐正念し、生涯を終えたという。<sup>17</sup>

また、五十三佛と三十五佛はセットにされることが多い。隋の開皇年間、僧倫は武陽の理律師のもと聽法し、半夏にして五色の光が車輪の如く僧倫の心を照らすのを衆とともに見た。その光の中にて五十三佛を禮したが、光は消えず、更に三十五佛を禮すると光は収まったという。<sup>18</sup> 次節でみる東魏の高陽寺碑陰においても兩者がともにみえる。また北魏普泰元年（五三一）朱法曜造像碑には「比丘僧振、爲父母造卅五佛」とあり、同じ頃に造られたと推測される朱黑奴造像碑には「比丘僧振造五十三佛、爲曠劫諸師現在諸師但越施主・・・」とあり、おそらく同一人物が三十五佛と五十三佛を異なる碑に造っている。五十三佛の北朝時代の紀年造像記としては、他に、龍門石窟古陽洞の北魏永平四年（五一）黄元德造像記、<sup>19</sup> フリア美術館所藏の正光二年（五二）比丘劉法藏造像記<sup>20</sup>がある。

④十方（諸）佛・・四方四維上下の佛であり、各方角に一佛ずつであれば、十方十佛となる。東西南北の四方、東西南北上下の六方、四方四維の八方佛として表される場合も多い。有名であるのは、『金光明經』の東方阿閼、南方寶相、西方無量壽、北方微妙聲佛という四方佛、また、次に述べる『法華經』の八方の十六王子、そして『十住毘婆沙論』あるいは『觀佛三昧海經』にみえる十方佛名などである。しかし、これら以外にも他の經には多くの十方佛名があるのには注意しておきたい。十方佛でも千を超えるものとして『現在十方千五百佛名并雜佛同號』（大正藏八五

卷所收<sup>(23)</sup>がある。具體的數を言わなくなると、十方一切諸佛となり、諸佛名の禮拜による懺悔儀禮においても、さきほど例示した『觀藥王藥上二菩薩經』のように、個々の佛名を禮した後に、十方諸佛を禮拜するという形式をとるものも多い。十方諸佛信仰は北魏のかなり早い段階からあったことが、興安三年（四五四）五月十日の紀年題記を有する『大慈如來告疏』に、十方諸佛を一心に敬禮するという語がみえることからもわかる。また、『出三藏記集』卷四「新集撰撰失譯雜經錄」に「有稱十方佛名得多福經一卷（抄）」という經名がみえるように、十方佛もその稱名による功德が期待されていた。

十方佛にかかわる造像について、梁の武帝は同泰寺にて十方銀像や十方金銅像を造り、無遮大會を執り行っている。造像銘においても北周保定二年（五六二）「十方四面石像<sup>(25)</sup>」や北齊天保十年（五五九）「十方釋迦像十軀<sup>(27)</sup>」を造つたという事例、さらに邑義道俗が十方諸佛一切賢聖に敬白するという武定七年（五四九）の事例もみられる。

⑤十六王子・・十六王子は『法華經』化城喻品にみえ、大通智勝佛の十六人の王子が沙彌となり、その佛の説法を聴き、教えを廣めた因縁により、後に成佛して四方四維の八方の佛となったものである。第一番目の佛が東方の阿闍、第九が西方の阿彌陀であり、最後の第十六の佛が娑婆國土の釋迦である。なお、『法華三昧懺儀』卷一に、「一心敬禮法華經中過去二萬億日月燈明佛、大通智勝佛、十六王子佛等一切過去諸佛。」[T46:951c]とあるように、十六王子佛名は懺悔儀禮にも導入されている。十六王子を石刻造像にとりいれることについてはかなり流行していたようであり、その事例は少なからずある。詳しくは、張總・頼文英氏の論考を参照いただきたいが、筆者も新たに発見した事例を次節でいくつか紹介している。

⑥千佛・・千佛といえば現在賢劫に出現するとされる千佛をさしている場合が多い。『維摩詰所説經』法供養品



には、過去無量阿僧祇劫に藥王如來あり、寶蓋という名の轉輪聖王が月蓋をはじめとする王子千人とともに佛を供養したが、その時の月蓋が釋迦であり、王子千人は迦羅鳩孫駄佛から樓至佛までの現在賢劫の千佛であるという<sup>32</sup>。千佛の因縁には異説が多く經により異なるが、この例のように、ともに佛の説法を聞いた千人が後に千佛となるという枠組みをとるものが多い。先程五十三佛のところ而言及した『觀藥王藥上二菩薩經』では、千人ではなく、三千人が過去・賢劫・未來の三千佛となるとしている。個々の千佛の具體名がみえるのは、現存するものでは、『竺法護譯『賢劫經』、失譯の『過去莊嚴劫千佛名經』、『現在賢劫千佛名經』、『未來星宿劫千佛名經』などである。大正藏所收の『現在賢劫千佛名經』(No.417a)では、第一から順に「拘那提佛」、「拘那含牟尼佛」、「迦葉佛」、「釋迦牟尼佛」、「彌勒佛」、「師子佛」、「明焰佛」となっており過去七佛の後三佛が組み入れられている。

千佛の禮拜は實踐を重んずる僧たちによって修されていた。例えば、南齊の永明十年(四九二)に七十三歳で遷化した超辯は、定林上寺に止住すること三十餘年、『法華經』を日ごとに一遍誦し、さらに千佛を禮拜すること百五十餘萬拜に達したという<sup>33</sup>。また、北齊天保六年(五五五)、八十歳で入寂した僧範は、「華嚴に意を留むるを來報の業と爲し、夜に千佛を禮するを一世の常資と爲し<sup>34</sup>」たという。『佛祖統紀』卷三九開皇三年の條には、海陵の沙門惠盈が晝夜六時に三千佛を禮し、民の饑苦を救おうとしていたが、ある日『法華經』を講じたところ、五道大神と稱する神が授戒法を請うたとある。

千佛の造像について、早くも東晉時代に竺道壹が嘉祥寺にて「金牒千像」を造っている<sup>35</sup>。また、次節で示すように炳靈寺石窟の五世紀初め頃の西秦時代の題記にも千佛を造ったという題記が残されている。龍門石窟蓮華洞には方等懺法に基づく行道を修し、賢劫千佛を造り、皇帝以下衆生までが生々賢劫千佛に侍するのを願ったことを記した

表二 北朝時代千佛造像銘目録

年	月日	王朝	造像名稱	主な収録書	銘文抜粋	關係地・所藏
508	0000	北魏	正始五年造千佛塔記	文物 1996.5.61	「正始五年造千佛塔。」	青州市黃樓鎮遲家莊北興國寺遺址出土
520	0223	北魏	晏僧定邑子六十七人等造像碑	考古與文物 1999.6.59	「造千佛石像一區、四面細好銘一區、精舍一區、□雜果七十餘□。」	陝西永壽縣永太鄉車村發見。永壽縣文化館所藏
525	0813	北魏	中明寺比丘尼道暢等造像記	彙録1133、拓5003、魏目185	「依方等行道、願造玄(賢)劫千佛」「生々世々待玄劫千佛。」	龍門第0712窟蓮華洞 N8
536	0927	東魏	七寶山靈光寺道人慧顔、慧端等造像記	『定襄金石攷』1	「千像大唯那」「造七佛、彌勒下生、當來千佛。」「咸願四海羣賢英?等迭相率化入邑崇千佛。」	山西七寶山靈光寺。七巖山千佛殿
541	0625	東魏	前趙郡太守嘉殷州刺史河間邢生等造像碑	山右1、『道端良秀著作集』5.151:238	「千像主」	山西孟縣興道村摩崖
541	1122	東魏	豐樂寺比丘貝光等造像碑	拓G081、大村259	「剖刊朝□、零象一千。」	山西
546	0227	西魏	權早郎等造像碑	張寶璽『甘肅佛教石刻造像』213	「造一?劫石象千佛。」	出土地不明。甘肅省博物館所藏
552	0715	北齊	討寇將軍長子縣令魏贊等造像記	松原376	「造石像一軀、并千像。」	傳山西省將來。東京國立博物館所藏
558	0208	北齊	魯思明等合邑千人造像	拓7071、百品165、京NAN0535X、魯一六979	「合邑千人共・・・八繡像一區、合有千佛、人中石像兩區。」	(原在新鄉市)河南博物院所藏
559	0715	北齊	比丘法悅邑子等千人(禪慧寺佛幢)	拓7085、山右2	「願造千像成就」「千像主」	原在山西介休縣史村。太原文廟所藏

造像銘文が残されている。この事例も含めて、北朝時代の紀年造像銘文にみえる千佛については表二にまとめた。この表を参照すると、像の供養者は集團であるものが多く、とりわけ五五八年、五五九年の造像は、邑義千人で千佛をつくるという、名目上は一人一佛の對應になっており興味深い。また、千佛という銘を有する造像は各地でみられるものとりわけ東西魏分裂以後の山西地方に多く分布していることがわかる。

千佛以上の數では、時代はやや下るが、おそらく十二卷『佛名經』による一萬五千佛を禮拜したという記事が僧傳にみえる。徳美は隋の開皇の末に禮懺を業とし、太白山に行き佛名經一十二卷を誦し、懺を行ずる時にはいつも誦しかつ禮拜した。毎年の禮懺において道場が散じてても、期間が過ぎること七日間、一萬五千佛を日ごとに一遍したといふ。<sup>(36)</sup> 慧聰は、『法華經』の常不輕菩薩は専ら經典を讀誦するようなことはせず、ただ四衆を禮拜する行を修してただけであるのに六根清淨を得たのであるから、私はどうして諸佛世尊を禮拜しないであろうか、と言ひ、別院にて門を閉じ常に一萬五千佛を禮し、經（おそらく十二卷『佛名經』）によつて自ら佛名を唱え、一々の佛を禮拜した。ある寺僧がその所作を怪しんでのぞき見すると、慧聰が頭を下げ禮拜すれば天龍八部等も頭を下げるのを見た。唐の貞觀年間には、その院には人の往來が絶えたが、毎夜常に彈指・禮拜・行道などの音を聞いたといふ。<sup>(37)</sup>

以上で論じてきた諸佛は、たとえ遠い過去の世界の佛であつたとしても現在この世界に關わりがないのではなく、その名號の禮拜・稱名によつて現實に功德がもたらされると經典に説かれている。僧傳にも多佛名の稱名・禮拜が懺悔滅罪の行として實踐されていたという記載があり、造像もなされていたことがわかる。次節では、個々の造像に残された佛名についてより詳しく検討してみたい。



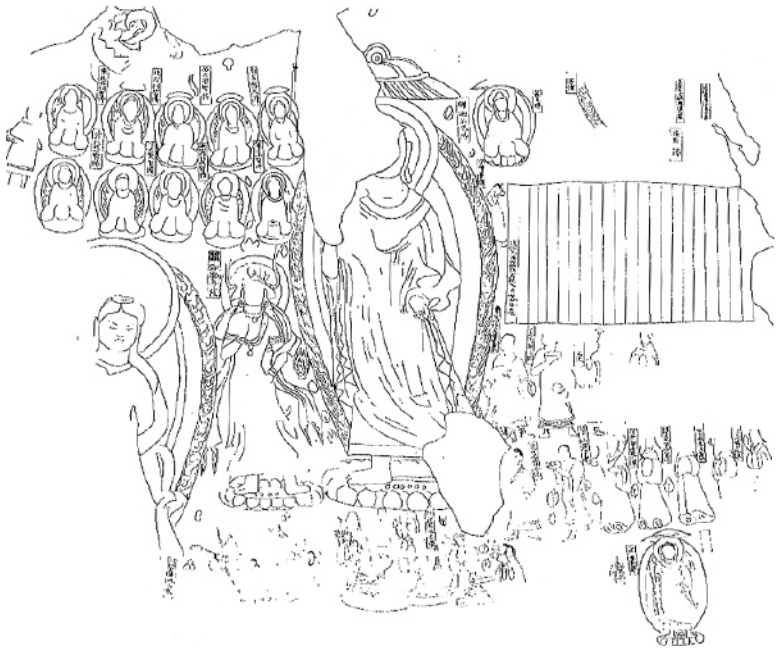
圖一 大禪師曇摩毗等造像

## 第二節 北朝時代の多佛名石刻諸事例

北朝時代の造像においては、實に多様な佛名が刻まれ、あるいは墨書されている。以下、年代順に注目すべき事例をとりあげ紹介してみたい。なおここでとりあげる諸事例の著録などについては、篇末の別表を参照いただきたい。

①大禪師曇摩毗等造像記 炳靈寺石窟第一六九窟 建弘元年(四二〇) 圖一・二一

石刻ではないが、多佛名を記した最も早期の事例は、五胡十六國時代までさかのぼる。それは炳靈寺石窟第一六九窟に墨書された諸佛名である。この窟には西秦の頃造られた佛像が多くあるが、その中でも、北壁の西秦建弘元年(四二〇)の紀年を持つ發願文を有する一區畫の佛塑像や壁畫佛の傍には、像と對應する佛名が多く墨書されている。これについては、張寶璽氏や賴鵬舉氏によって既に明らかにされており、新たに述べるべきことも特にはないが、早期の重要な事例であるので、兩氏の報告によ



圖二 大禪師曇摩毗等造像描き起こし

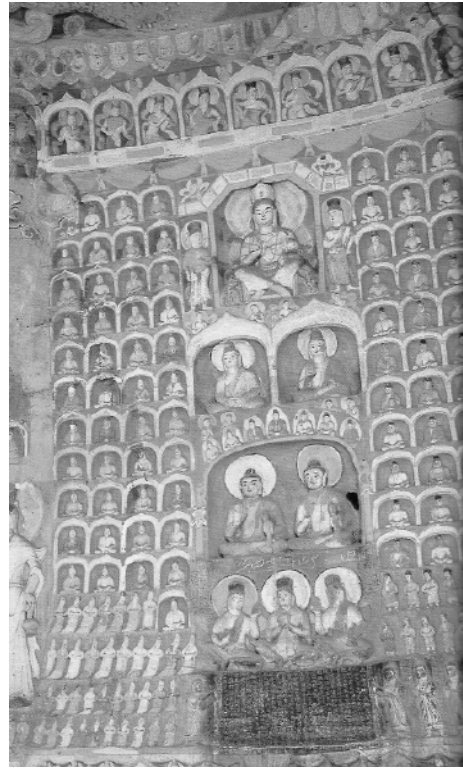
りつつ紹介しておきたい。

圖一の中央の本尊である塑像の傍に「無量壽佛」、左脇侍（本尊の向かって右側）に「得大勢志菩薩」、右脇侍に「觀世音菩薩」の榜題が付され、無量壽三尊像であることがわかる。その「得大勢志菩薩」を向かって左下端にあらわしたのが圖二である。「得大勢志菩薩」の向かって右隣に「彌勒菩薩」の題記をもつ菩薩の畫像があり、さらに隣に「釋迦牟尼佛」の榜題を持つ立佛畫像が描かれる。その向かって右上には「藥王佛」と題される小坐佛が描かれている。「藥王佛」は、『維摩經』にみえ、釋迦の前世である月蓋比丘に授記を與えた佛である。その釋迦の隣に彌勒菩薩が描かれるので、過去↓現在の未來の三世にわたる法燈の繼承を表していると考えられる。張寶璽氏の報告によれば、さらにその右に「□□志菩薩」、さらに「接引佛」と

いう題記があり、「接引佛」は阿彌陀佛のことであるという。そうであるとする「□□志菩薩」は「大勢志(至)菩薩」であると想定される。

願文の下には供養者の畫像とともにその名を記した題記が上下二列にある。上列には「□國大禪師曇摩毗之像」「比丘道融之像」の題記があり以降は磨滅している。下列には、「比丘慧普之像」、以下、「博士」や「侍生」、「清信女」などの肩書を持つ在俗供養者がつづく。特に注目されるのが供養者行列を先導する曇摩毗であり、この人物は、『高僧傳』卷十一玄高傳にみえる「外國禪師曇無毘」であることが明らかにされている。曇無毘は『高僧傳』に「領徒立衆訓以禪道。然三昧正受既深且妙。」とあるように禪定に秀でた人物であった。また、北魏の太子拓跋晃が師事したことでも有名な玄高が彼のもとをたずね法を授かったとされる。

さて、これら一群の題記において最も注目すべきは、既に指摘されているように、「東□□□□□」、「北方行智佛」、「西方習智佛」、「南方智火佛」、「東北方明智佛」、「東南方□□□□□」、「上方伏怨智佛」、「下方梵智佛」、「西北方自在智佛」、「西南方上智佛」とある十方佛の題記である。この十方佛は一般的な『十住毘婆沙論』・『觀佛三昧海經』にみえるものではなく、『六十華嚴』如來名號品によつてゐる。筆者の収集した資料においても類例は見當たらず、大禪師曇無毘の高度な禪觀實踐に裏付けられた佛教思想が反映されたやや特殊な事例と考えるべきものであろう。これらの諸佛名がすべて統一したテーマのもとに願文と同時に書かれたものかどうか断定はできない。ただし、發願文には、「遂請妙匠、容茲尊像、神姿琦茂、□□□□□、□□□□□、□□□□□、畫作慈氏。」とあり、頼鵬舉氏の述べるとおり、二菩薩を脇侍に持つ塑像の無量壽佛を、曇無毘によつて先導される供養者たちが本尊とみなしていたと考えるのが自然であり、十方佛も曇無毘の無量壽佛を中心とした淨土の觀想のテーマに組み込まれたものであると考えてよいだろう。<sup>41)</sup>



圖三 雲岡石窟邑義信士女五十四人造像

造像記より序列があがっているので、上述の造像群よりも時期がやや遡るとされている。

② 邑義信士女等五十四人造像記 雲岡石窟第一一窟東壁上部 北魏太和七年（四八三） 圖三  
雲岡石窟には壁一面に小佛龕で埋め盡くされた窟もあり、長廣敏雄氏が雲岡石窟の多佛龕について詳論されているので、氏の説によりながら紹介しよう。雲岡石窟第一一窟東壁上部には太和七年（四八三）の紀年銘文を有する區畫がある（圖三）。願文には「太和七年歲在癸戌八月卅日邑義信士女等五十四人自惟往因不積、生在末代、・・是以共

また、第一六九窟には別の場所に「比丘慧眇、道弘、法□、曇幽、曇□、曇要、鸞化、道融、慧勇、僧林、道元、道雙、道明、道新、曇普、法炬、慧□等、共造此千佛像。願生之處常值諸佛、・・供事千佛、成衆正覺。」という發願文があり、千佛を造り、千佛に供事し正覺を成ずることが願われ、千佛信仰が表されている。道融は前述の造像の供養者行列において、曇無毘のすぐ後にみられ、この

相勸合、爲國興福、敬造石廟形像九十五區及諸菩薩。」とあり、邑義の造像の最も早い紀年を持つものとしても注目される事例である。造像は中央を五段に分け、上から彌勒菩薩像龕、二區の坐佛像龕、二佛竝坐像龕、さらに「觀世音菩薩」、「大勢至菩薩」、「文殊師利菩薩」という題記を持つ三菩薩竝坐像である。その兩側に、合計八十八佛龕が整然とならぶ。二佛竝坐像龕を一區として數えると中央部分は七區になり、三十五・五十三の八十八を加えると九十五になるというのが長廣氏の説である。三十五佛や五十三佛の具體名が刻まれたわけではないが邑義造像においてこれら多佛に對する信仰が表現されていることは留意すべきである。

③ a 比丘曇覆摩崖造像碑・b 比丘尼仙造像記 水泉石窟 北魏 b・圖四

水泉石窟は龍門石窟の東方に位置する北魏時代に開かれた比較的小規模な石窟である。この石窟の開窟者は比丘曇覆であり、窟外に北魏太和十三年（四八九）の紀年を持つ題記<sup>(4)</sup>が残存している。ただこの年がこの碑の作成年ではないようである。その銘文には以下のようにある。

洛州阿育王寺造銅像三區、・・・長三尺金度色并佛□興 造石 窟一區、中置一萬佛。造一千五百龍華像一區。  
／□州鉢□山西北大狂水南・・・□三里造五千佛堂一區。當皆城東北四里造一千五百龍華像一區。／□□□□  
東北三里造萬佛三・・・□浮圖一區。延□堆上千佛天宮一區。／□□□狂水西小水南等二里・・・□千佛天宮一區。  
小水北二里在黑山中造五□華勝佛一區。／□□□西□頭<sup>2</sup>三里田溪谷中・・・□一千五百龍華像。陸渾川  
葭城西小水北各一里造千佛天宮一區。／造一千五百龍華像一區。□・・・□造一千五百龍華像一區。造十六  
王子行像十六區。 五縣内／合大小像三萬六千一十六區<sup>(3)</sup>・・・經一千卷。／大魏太和拾參年比丘曇覆爲・・・





圖四 水泉石窟比丘尼仙造像

□□并□□□三界五道受苦者、  
因此之福、願令普同受樂。／（以下略）

この題記において注目すべきは、萬佛天宮、千五百龍華といった多佛信仰がうかがえ、『法華經』にみえる十六王子の行像も造っている点である。千五百という数は、『出三藏記集』巻四の「千五百佛名（經）」に基づくとも考えられる。

また、この水泉石窟内には北魏永熙三年（五三四）の紀年銘文を持つ屋殿形の造像區畫がある（圖四）。筆者による造像願文の抄録を以下に示させていた  
だく（□内の字は次の字の右

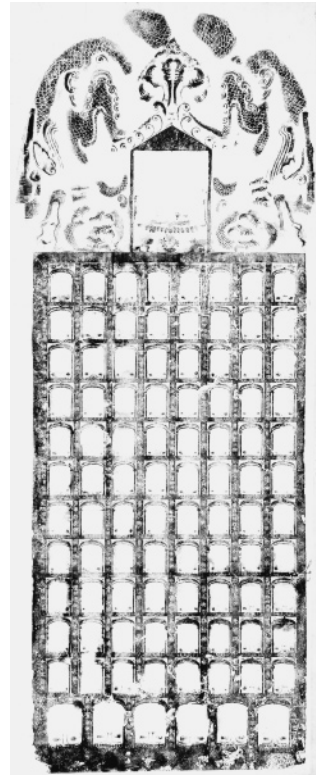
上に小字で刻まれている。

大魏永熙三／年二月十三／日比丘尼仙／仰爲累劫師／僧皇帝陛下、／敬造七佛七／區、釋迦多寶／佛、定光佛、  
大／慈大悲佛、日／月光明佛、彌／勒「佛」像一區、虛／空藏菩薩、十／「方」大地菩薩。／・・・／復願七世  
父／母所生父母／兄弟卷蜀鄉／火邑儀□南家卷□□□／爲王皇□子／元開□僧護、／緣此□得、願／使衆□願□  
／萬善普會□／爲一切受苦／衆生離苦得／樂、所願□□。

これは比丘尼の發願による造像であるが、願文の中に「郷（香に通ず）火邑儀」とあるので、邑義がこの造像事業にかかわったとみてよいだろう。先述したとおり、これら諸佛龕は全體で屋殿形の一區畫を形成しており、本尊は交脚彌勒菩薩である。その本尊の兩側に各七龕、合計十四の小坐佛龕が存在する。これらの佛名の典據となる文献はまだ明らかにされていないが、筆者の考察によれば、梁の『慈悲道場懺法』との關係が考えられる。彌勒を本尊とするのがまず『慈悲道場懺法』と合致し、「日光光明佛」も卷三にみえる。「大慈大悲佛」はみえないが、例えば卷三に「大慈大悲、唯願救拔一切苦惱、令諸衆生即得解脫、改往修來不復爲惡。」[T45:933c-934a]と「大慈大悲」という語が使われ、さらに「十方大地菩薩」という表現はこの『慈悲道場懺法』卷一〇にしか見えない。『慈悲道場懺法』は、梁武帝の時に主要部分が編纂されたと現在のところ考えられている<sup>44</sup>。ただし、この造像銘文中の佛名が完全にみられるわけではないので、直接この文獻を参照したのではないと考えた方がよいかもれない。

④高陽寺碑 東魏天平二年（五三五） 圖五

この碑は高さ高三米を超える大型の有名な碑で、河南省の高陽書院に現存する。碑文は『金石萃編』などの歴代の



圖五 嵩陽寺碑碑陰

金石書に著録されており、嵩陽寺の創建者である禪師法生とその檀越裴衍とのかかわりや、嵩陽寺の創建の経緯をうかがうことができ、史料的にも貴重である。長文の銘文には「天平二年四月八日倫豔二統乃刊石樹碑、雕飭尊像、贊貽嘉福、顯彰聖儀。

高足大沙門統遵法師・・(中略)・・

接引群生、舟航巨海、率諸邑義、繕立天宮、整修嚴麗、兼造白玉像一龕。」とある。天平二年は東魏王朝が成立してまもない時期である。銘文によると、法生の弟子の倫・豔という名の僧が碑を建て、尊像を彫刻し、さらに高弟である遵法師が諸邑義を率いて「天宮<sup>6)</sup>」を修造し、白玉像一龕を造ったという。銘文には他に「虔禮禪寂、六時靡輟、方爲衆聖萬劫之靈場、八輩十方三世之苑囿也。」とあり、晝夜六時缺かさず禮拜禪定することによってこそ、この地が萬劫十方三世にわたる賢聖の靈場苑囿となると實踐行を強調している。

碑陽には、本尊である坐佛龕の下に供養者像が十體、さらにその下に過去七佛龕がならび、榜題が向かって右から順に「唯衛佛」、「式佛」、「隨葉佛」、「拘樓秦佛」、「拘那含牟尼佛」、「迦葉佛」、「釋迦牟尼佛」と付されている。

さて、この碑は碑陽の銘文の内容に關してはしばしば論及されてきたが、本尊の龕以外に多くの佛龕があり、特に碑陰に多くの小佛龕とともにその佛名が刻まれていることについては看過されている。管見の限り、魯迅だけがこの

佛名を移録している。<sup>46)</sup> 幸い京都大學人文科學研究所には碑陰の拓本が所藏されているので(圖五)、その佛名を【録文一】に表した。碑身の小佛龕の数は、縦十一列×横八行と最下列が横六行で、合計九十四龕である。最下列を除く佛名は、『觀藥王藥上二菩薩經』の五十三佛と『決定毘尼經』の三十五佛であり蛇腹狀に配される。ただし、三十五佛の第一番目の釋迦牟尼佛が除外され、代わりに「龍自在王佛」が33と34番の間に挿入されている。龍自在王佛は傳北魏吉迦夜譯『稱揚諸佛功德經』卷上において、東方の正覺世界の佛とされ、その名を唱えれば、雷、雹、霜などの災難から逃れることができるという。<sup>47)</sup>

問題は、最下列の六方佛名であり、向かって右側の佛から順に列記すると、「西方殊勝正覺佛」、「北方寶願神金佛」、「下方師子尊教佛」、「上方□□如來佛」、「南方□□佛刈佛」、「東方寶海佛」となる。東方の寶海佛は『稱揚諸佛功德經』において東方の第一番目の佛であり、西方の殊勝佛は同經の西方佛において阿彌陀佛に次いで第二番目に登場する佛である。「殊勝」のあとに「正覺」がついているのは、經文の「號曰殊勝如來、至眞、等正覺、明行成爲、善逝、世間解、無上士、道法御、天人師。」「[T14:99b]とごう「等正覺」からとつたのであろうか。南方と北方の佛についてはその典據が不明である。上方の「□□如來佛」という佛名は「如來」と「佛」が意味的に重なり、翻譯經典ではありえない奇妙な表現であるが、僞經『普賢菩薩說證明經』には「上方香積如來佛」、「下方師子億像佛」とあり、これを参照した可能性も考えられる。<sup>48)</sup> あるいは、現在亡佚した經典を参照したとも想定できる。このように、異なる經の佛名を参照して組み合わせ、それが必ずしも經そのままの形ではないという事實は注目される。

最後に、碑陰全體の佛の構成をみると、最上の位置である碑首の龕に彌勒を配置し、碑身には過去佛の五十三佛、さらに釋迦を除いた三十五佛を經とは逆の順序に上から蛇腹狀に配列し、最下段に六方佛を配置するという、三世六

【録文一】 嵩陽寺碑碑陰 上半部（數字は筆者が付加。五十三佛の順番を表す。）

- 53 一切法常滿王佛
- 38 妙音勝佛
- 37 師子吼自在力王佛
- 22 寶蓋照空自在王佛
- 21 金華光佛
- 6 摩尼幢佛
- 5 梅檀光佛
- 52 大通光佛
- 39 常光 幢佛
- 36 慧□勝王佛
- 23 虛空□華光佛
- 20 廣莊嚴王佛
- 7 歡喜藏摩尼寶積佛
- 4 多摩羅跋梅檀香佛
- 彌勒
- 51 海慧自在通王佛
- 40 觀世燈佛
- 35 日月朱光佛
- 24 瑠□莊嚴王佛
- 19 善意佛
- 8 一切世間樂見王大精進佛
- 3 普靜佛
- 僧主
- 比丘
- 50 金海光佛
- 41 慧威燈王佛
- 34 日月光佛
- 25 普現色身光佛
- 18 賢善尊佛
- 9 摩尼幢燈光佛
- 2 普明佛
- 49 才光佛
- 42 法勝王佛
- 33 龍種上尊王佛
- 26 不動智光佛
- 17 梅檀窟莊嚴勝佛
- 10 慧炬焰佛
- 1 普光佛
- 48 无量音聲王佛
- 43 須彌光佛
- 32 善寂月音妙尊智王佛
- 27 降伏諸魔王佛
- 16 慈藏佛
- 11 海德光明佛
- 35 寶蓮華善住娑羅樹王佛
- 47 阿閼毗歡喜光佛
- 44 須曼那華光佛
- 31 世靜光佛
- 28 才光明佛
- 15 慈力王佛
- 12 金剛半強普散金光佛
- 34 寶華遊步佛
- 46 大慧力王佛
- 45 優曇鉢羅華殊勝王佛
- 30 彌勒先光佛
- 29 智慧勝佛
- 14 大悲光佛
- 13 大強精進勇猛佛
- 龍自在王佛

嵩陽寺碑陰 下半部

西方殊勝正覺佛

26 財功德佛

25 蓮華光遊戲神通佛 10 寶月佛

9 現无患佛

北方寶願神金佛

27 德念佛

24 功德華佛

11 无垢佛

8 寶月□佛

下方師子尊教佛

28 善名稱功德佛

23 那羅延佛

12 離垢佛

7 寶火□佛

上方□□如來佛

29 紅炎幢王佛

22 无憂德佛

13 勇施佛

6 精□喜佛

南方□□佛刈佛

32 善遊歩佛

21 光德佛

14 清淨佛

5 精進軍□

東方寶海佛

30 善遊歩功德佛

20 无量菊光佛

15 清淨施佛

4 龍尊王佛

31 鬪戰勝佛

19 栴檀功德佛

16 娑留那佛

3 寶光佛

33 周匝莊嚴功德佛

18 堅德佛

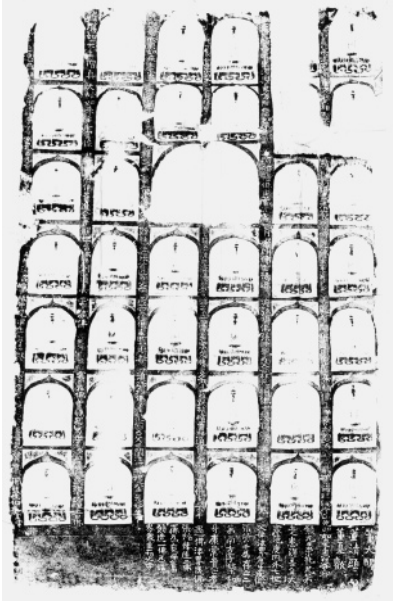
17 水天佛

2 金剛不壞佛

北朝時代の多佛名石刻



圖六 務聖寺造像碑碑陽



圖七 務聖寺造像碑碑陰

方佛の形態をとり、諸佛が時間的空間的に普遍的に存在することを表現している。懺悔儀禮と關わりの深い三十五佛と五十三佛名を刻んでいることから、これら佛名を唱え禮拜することによる懺悔が實踐されていたと考えられる。

⑤務聖寺碑 東魏天平二年(五三五) 圖七・圖八  
この碑は嵩陽寺碑と同年の紀年を有し、關野貞・常盤大定兩氏が調査した當時、少林寺の緊那羅殿に存在した<sup>④</sup>。碑陽(圖六)の本尊は、後述する銘文によると釋迦佛であり、觀音、文殊が脇侍菩薩である。本尊龕の上部には、七佛龕が横一列に並んでいる。對應する刻まれた佛名は、供養者名を省略して示すと「波戸佛」、「尸棄利佛」、「□□佛」、「□□牟尼佛」、「句樓秦佛」、「仇那含佛」、「迦葉佛」となり、第一節で言及した七佛の二系列のうち、『長阿含經』の系統を採用しているのは珍しい。一方、碑陰には



圖八 務聖寺造像碑  
碑側

れ願文より無量壽佛とわかる。その立像の下に願文が刻まれる。願文の全文を掲げると以下の通りである。

夫靈眞玄廓、妙絶難測。非言莫能宣其旨、非像無以表其狀。言宣二六之教、像跡四八之璃。豈不淵玄冲漠、巍巍惟極者哉。是以務聖寺檀主／張法壽能於五蓋重羅之下、契斷恩愛塵勞之繪網、熙平二年捨宅／造寺、宿願暫像。福不止己、規度法界、尋其羅絡、情苞聖境。自非藉因積／劫、英貴累世者、熟能發茲宏闊願行者焉。息榮遷、脩和、行慈仁孝、世習／精懿、志慕幽寂、妙眞遐願、刊石建像、釋迦文佛、觀音、文殊、仰述亡考平／康舊願、復於像側、隱出无量壽佛。福洽法界、考妣等神、捨茲質形、悉／稟淨境、同曉薩雲、覺道成佛。／

大魏天平二年歲次乙卯四月十一日比丘洪寶銘。

文によると、務聖寺の檀越主であった張法壽が熙平二年に捨宅して寺を建立した。父の亡後、息子の榮遷と修和が亡父の宿願であった佛像（この造像碑）を造った。さらに碑側に無量壽像を刻出し、亡父母の淨土への往生を願ったという。無量壽佛の造像と淨土往生信仰との結びつきがみられる貴重な資料であるが、碑陰に刻まれた諸佛名もそれに劣らず重要である。碑陰の佛名については管見の限りいまだその全容について考察されていない。碑陰の佛名を移

縦七×横六、うち上から三段目の中央の二龕が釋迦多寶竝坐像の一龕になり、合計四十一の佛龕がならぶ。その佛龕の傍には、佛名と供養者名が刻まれている（圖七）。

碑側（圖八）には佛立像が線刻さ



【録文二】務聖寺碑碑陰（供養者名略、數字は筆者が付加。）

- |          |           |           |          |          |                  |             |
|----------|-----------|-----------|----------|----------|------------------|-------------|
| 1 ．．．來   | 7 金華炎光相如來 | 13 西无量壽．． | 18 ．．那佛  | 24 華光佛   | 30 雲自在王．．        | 36 寶藏佛      |
| 2 難勝如來   | 8 大炬如來    | 14 北微妙聲佛  | 19 觀世音佛  | 25 常滅佛   | 31 雲自在佛          | 37 多摩羅跋耨檀香佛 |
| 3 无垢熾寶如來 | 9 寶相如來    | 15 釋迦多寶二佛 | 20 難勝佛   | 26 虛空住佛  | 32 須彌相佛          | 38 闍浮那提金光如來 |
| 4 光明王相如來 | 10 寶勝如來   | 21 藥師琉璃光佛 | 27 師子音佛  | 28 須彌頂佛  | 33 多摩羅跋耨檀香神通佛    | 39 名相如來二佛   |
| 5 金炎光明如來 | 11 東方阿閼如來 | 16 阿彌陀佛   | 22 日月燈明佛 | 29 大通智勝佛 | 34 梵相佛           | 40 光明如來     |
| 6 金山寶蓋如來 | 12 南方寶相如來 | 17 文殊師利佛  | 23 普光佛   | 35 帝相佛   | 41 寶華功德海琉璃金山光明如來 |             |

表三 務聖寺碑陰佛名の典據

務聖寺碑陰佛名	主な典據
務聖寺碑陰佛名	主な典據
1□□如來	
2難勝如來	『維摩經』 菩薩品
3无垢熾寶如來	『金光明經』 功德天品 「无垢熾寶光明王相如來」
4光明王如來	『金光明經』 功德天品 「无垢熾寶光明王相如來」
5金炎光明如來	『金光明經』 功德天品 「金焰光明如來」
6金山寶蓋如來	『金光明經』 功德天品
7金華炎光相如來	『金光明經』 功德天品 「金華焰光相如來」
8大炬如來	『金光明經』 功德天品
9寶相如來	『金光明經』 功德天品
10寶勝如來	『金光明經』 功德天品
11東方阿閼如來	『金光明經』 功德天品
12南方寶相如來	『金光明經』 功德天品
13西无量壽□	『金光明經』 功德天品 「西方无量壽佛」
14北微妙聲佛	『金光明經』 功德天品 「北方微妙聲佛」
15釋迦多寶二佛	『法華經』 見寶塔品
16阿彌陀佛	『法華經』 化城喻品十六王子 西
17文殊師利佛	
18・・那佛	
19觀世音佛	十二卷『佛名經』
20難勝佛	『維摩經』 菩薩品 「難勝如來」
21藥師琉璃光佛	『灌頂經』 卷12
22日月燈明佛	『法華經』 序品
23普光佛	『觀藥王藥上經』 過去五十三佛の第一、『過去現在因果經』
24華光佛	『觀藥王藥上經』 過去千佛の第一「花光佛」、または『法華經』 譬喻品 舍利弗
25常滅佛	『法華經』 化城喻品十六王子 南
26虚空住佛	『法華經』 化城喻品十六王子 南
27師子音佛	『法華經』 化城喻品十六王子 東南
28須彌頂佛	『法華經』 化城喻品十六王子 東
29大通智勝佛	『法華經』 化城喻品
30雲自在王□	『法華經』 化城喻品十六王子 北
31雲自在佛	『法華經』 化城喻品十六王子 北
32須彌相佛	『法華經』 化城喻品十六王子 西北
33多摩羅跋耆檀香神通佛	『法華經』 化城喻品十六王子 西北
34梵相佛	『法華經』 化城喻品十六王子 西南
35帝相佛	『法華經』 化城喻品十六王子 西南
36寶藏佛	『悲華經』
37多摩羅跋耆檀香佛	『法華經』 授記品 大目犍連
38闍浮那提金光如來	『法華經』 授記品 大迦旃延
39名相如來	『法華經』 授記品 須菩提
40光明如來	『法華經』 授記品 摩訶迦葉
41寶華功德海琉璃金山光明如來	『金光明經』 功德天品

録したのが【録文二】であり、その佛名の典據となる經典を示すと表三のようになる。中央やや上よりの釋迦多寶竝坐佛龕が碑陰の諸佛の中心であり、これは周知のとおり『法華經』見寶塔品に基づいている。その隣には阿彌陀佛、その下には藥師瑠璃光佛と有名な佛が配置されている。他の諸佛名の主な典據は『金光明經』功德天品と『法華經』化城喻品の十六王子と授記品である。注意すべきは經の「無垢熾寶光明王相如來」を「無垢熾寶如來」と「光明王如來」に分割していることであり、これは經に忠實であろうとする態度とは異なると言え、例えば『大通方廣經』の諸經からの佛名の借用の仕方にも相通ずる<sup>30)</sup>。佛名の順序としては、表の番號の通り、向かって左上端より始まり右上端へとならば、次に二列目の向かって左より右へとならば、以下同様に最下列までならんでいると考えられる。

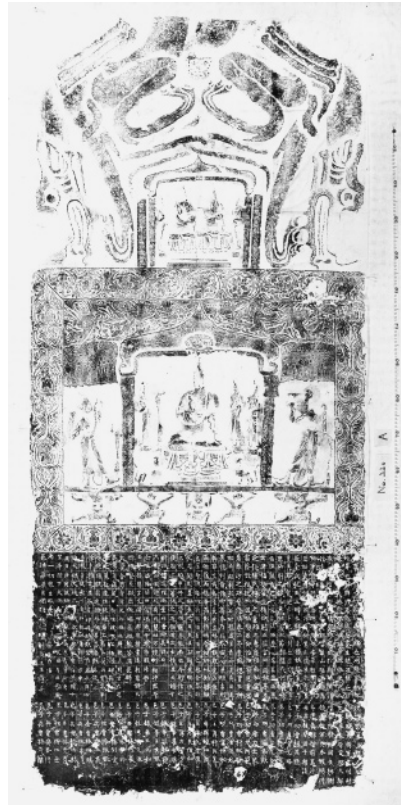
次に、あまり見慣れない佛名について解説しておきたい。まず「觀世音佛」と「文殊師利佛」というように、經では通常菩薩とされるのに對してこの造像銘では佛とされていることが注目される。「觀世音佛」については十二卷『佛名經』にみえるが、これに基づくというより、ともに代表的な菩薩であるため、佛として示したのであろう。他の石刻にも「觀世音佛」という名がしばしばみられる<sup>31)</sup>。最上列の2に「難勝如來」、上から第四列の20には「難勝佛」が刻まれている。難勝如來は『維摩詰所說經』の菩薩品の末に登場し、長者子善徳が維摩に献上した瓔珞を二分し、一分を最下の乞人に、もう一分を難勝如來に施したという。前後の經の文意は財施より法施の功德を強調し、最下の乞人に施すことあたかも如來福田のように考えて分別心無く施すことが法施であるとする。36「寶藏佛」は『悲華經』にみえ、五百の願をたて娑婆世界に生まれかわることを願った寶海に對して將來釋迦如來になるとの授記を與えた佛である。22「日月燈明佛」は『法華經』序品にみえ、過去世に二萬日月燈明佛がいました、相繼いで世に出て『法華經』を説いたという。24の「華光佛」については『觀藥王藥上經』過去千佛の第一、または、『法華經』の舍利弗の將來

成佛の名の二通り考えられる。37〜40の佛はそれぞれ順に大目犍連、大迦旃延、須菩提、摩訶迦葉の將來成佛の名である。

總じて見ると、『金光明經』の四方佛、『法華經』十六王子の八方佛と、釋迦に對して授記した過去佛、釋迦が授記した未來佛という構成であり、高陽寺碑と同様に過去現在未來の三世佛という時間・空間的廣がり意識されているといえる。さらに、『金光明經』功德天品から採用されている佛はみなその名を唱えることの功德が説かれており、『國清百録』所收「金光明懺法」においてもこれら功德天品の諸佛を奉請することがその儀式次第に組み込まれているように、やはりこれら多佛名を刻むことと稱名による懺悔儀禮との關係を示唆するものである。

⑥ 巨始光造像碑 西魏大統六年（五四〇） 圖九

この造像碑の歴史的背景については、周鍾氏によって詳しく紹介されている<sup>⑧</sup>。碑陽に刻まれた願文の最後に「巨始光合縣文武邑義等、仰爲皇帝陛下、大丞相、七世所生父母、存亡眷屬、爲一切衆生、敬造。」とあるように、巨始光を發願主とする、縣を擧げての大規模な邑義によるものである。「建義都督巢山監軍鎮遠將軍前平陽令高涼令安平縣開國侯」の巨始光が「像主」で、現職の高涼縣令尹虎子も「維那」として名を連ね、高涼縣の僧官のトップと考えられる「高涼三藏比丘辯賢<sup>⑨</sup>」が邑義の宗教的指導者である「邑師」となっている。縣の屬僚である功曹、主簿、録事、西曹掾、兵曹掾、金曹掾、租曹掾などが「邑子」として多數名を連ね、さらに「邑子族正」という肩書の多様な姓の者達も多數参加している。注目すべきは「使持節通直散騎□侍驃騎大將軍建州刺史正平太守當郡大都督華陰縣開國侯楊樹」と碑陽の願文の下部にみえる楊樹で、この人物は『周書』卷三四に立傳される楊樹であることが明らかにさ



圖九 巨始光造像碑碑陽

を持っていたと考えられる。碑陰には「光父被旨板授建興太守巨天祖」とあり、巨始光の父は建興太守を板授されるのみで他には官位についていなかったようである。板授（板官）とは、詔などによって人民の慰撫・獎勵などの目的のため、一定以上の年齢の多くの老人に與えられる實質のない名譽職であり、造像銘にもしばしば見える<sup>43)</sup>。巨氏は代々官僚を輩出するような家柄ではなく土着の豪族であったと推測される。高涼縣は現在の山西省西南部に位置し、當時、西魏と東魏の抗争の最前線にあった地域である<sup>44)</sup>。六百字を超える造像願文中には以下のようにある。

・：巨始光、自惟□因浮淺、樹業彫微、生於季葉、／長逢兵亂、王道時屯、群飛未接、妖熒充／斥、忠良異路。值龍變虎爭之秋、列士立功之會、常／思納肝之誠、又慕孫賓之節、契闊戎行、夷嶮／備經。艱危之中、恆發私願。遂心存至道、追慕／玄津、福祐無違、精誠剋立。莅宰向周、缺期月／之化、綏民撫政、乏童雉之惠。慶福嘉祉、

れている。傳によると、楊擲は正平高涼の人で、祖父の貴・父の猛は、ともに縣令であった。楊擲は權謀述數に長けており、東魏との戦いにおいて大いに軍功を挙げ威名をとどろかせた。建州刺史を授かり正平郡太守になったことも傳に記されている。つまり楊氏はこの高涼縣においてかなり大きな力

寔由／靈蔭、託根挺拔、因助獲善。仰惟三寶恩重、思／著聚沙之功。尋優填養正而遺風、想育王叔／世而繼範、故葉公好龍、感至義而見眞、目連／慕德、刻圖像而尊奉。乃藉本宿心、兼規古則。／輒率文武鄉豪長秀、竝竭丹誠、敬造石像一／區。．．．

願文には、巨始光が動亂の世において忠節を盡くして従軍し、艱難を経てきた中にも佛教を信奉し、縣令となって三寶の恩に報ずるため造像したことが語られている。龍を好きになり至る所に龍の像を描き、ついに本物の龍を見てしまったという葉公の逸話<sup>⑤</sup>や、佛が母に説法するため忉利天にのぼってしまったので、優填王が佛を思慕して目連の神通力によって工匠たちに佛の姿を見させ、佛の眞容を彫刻させたところ、佛が天から降りてくるに際し像が佛を出迎えたという逸話<sup>⑦</sup>に言及している。これは、誠心をつくして造像すれば、佛の眞容に見ることができるということを表現していると考えられる。この碑が建立された背景には、軍事的緊張に際し、土着の豪族も取り込んだ邑義による造像という集團的宗教行爲の機會に際し、皆が誠心に祈りを捧げることで、全縣の結束を強めるという意圖があったと考えられる。造像の功德による佛の加護を願い、さらには、眞の佛に見えることをも期待したのであろう。

以上の碑の性格から、そこに表現された佛教思想も縣を代表するような性質のものであったと考えられる。この碑には、碑陽の碑首の龕に、「左相多保佛塔證有法華經」と「右相釋迦佛說法華經」とあり釋迦多寶二佛竝坐像が彫られている。碑の中央の大龕は五尊像で本尊は坐佛である。傍には「發心起像主」と「當陽大佛主」の題記がある。

碑の一側面には縦二列に七龕がならび、その傍に過去七佛名が順に刻まれる。第一は缺損しており、以下、「二名□□□佛」「□□□葉佛主」「四名拘樓□佛」「五名拘那含牟尼佛」「六名加葉佛主□□□侍佛」、「七名釋迦牟尼佛主□□□佛」と供養者名とともに刻まれる。

碑陰の碑首の龕には、維摩文殊像がそれぞれ脇侍菩薩を従えて彫刻され、榜題に「文殊師利說法時」、「維摩詰居士示疾時」と刻まれている。その龕の下には半跏思惟菩薩像が線刻される。その下の大龕には、立佛が三童子とともに彫られている。榜題に「此是定光佛教化三小兒補施皆得須陀洹道」とあり、定光佛が三童子を教化し、布施させて三小兒はみな須陀洹果を得たといっている。これは定光佛授記と『賢愚經』阿輪迦施土品による阿育王施土説話が融合したものであることが既に指摘されている。<sup>86</sup>この定光佛授記の説話は授記による法の繼承を表現したのであろう。この大龕の兩側にそれぞれ縦二列で佛龕が一行四龕ずつならんでいる。榜題には「一名阿閼佛□□」から「十六名釋迦牟尼佛」まで『法華經』の十六王子の名が刻まれている。總じて見ると、多寶佛や十六王子など『法華經』の影響が強くあらわれていると言えよう。

⑦董黃頭造像碑 北齊天保九年（五五八）圖一〇

この造像碑は高さ一七六厘米の圓首碑であり、四面に佛像や供養者像が刻まれている。現在は山西省高平市文博館に所蔵されているが、もとは市南部の鞏村の大廟にあったという。造像銘中の供養者中に鞏氏は董氏とともに多くみえるので建立當時からこの鞏村にあったと考えてよいだろう。碑陽の下部に以下に掲げる願文が刻まれている。

法性無言、寄言以詮理、眞容妙／極、假像以表應。佛有如是十力／雄猛、大悲爲勿、化縁既周、雙林／取寂、佛雖去世、遺留經像訓世。／是以千載之末、有佛弟子董黃／頭七十人等正信無邪、生不值／佛、故□□□契崇邑義□造／釋迦碑像一區、彌勒慈氏、及无／量壽佛、藥師、定光、思惟、多寶、阿／難、迦葉、并諸菩薩。以此微善、願／皇 帝 陛下延祚無窮、四方／慕化、又願邑義諸人生生之處、／恆值諸佛、聞法悟解、法界衆生／發菩



圖一〇 董黃頭造像碑碑陰

提心、速致作佛。／大齊天保九年  
歲次戊寅七月壬辰朔廿七日戊午  
造。

以上の銘文により董黃頭をはじめとする七十人の邑義によって造像されたこと、また多くの佛像をつくったことがわかる。銘文中の佛名を實際の碑の佛像に比定してみよう。

碑陽の龕は、坐像を中心  
みよう。碑陽の龕は、坐像を中心  
に二菩薩二羅漢の五尊形式である。この本尊が釋迦であろう。この五尊像の佛龕は尖拱であり尖拱の上に坐佛が彫ら  
れている。おそらくこの坐佛が彌勒佛で銘文中では「慈氏」に相當するであろう。本尊の兩側には蹠踞の獅子を配し、  
それと同じ高さの栱柱の向かって左側には、半跏思惟菩薩像があり、その傍に「思唯主」の供養者肩書がある。向かっ  
て右側には定光佛授記の説話である儒童布髮の場面を表した像があり、傍に「定光像主」の供養者肩書がある。碑西  
面には「無量壽像主」の供養者肩書があり、無量壽佛は西方淨土の佛であるので、西面の佛像が無量壽佛である。で  
あるとすると、東面の佛像は東方淨瑠璃世界の佛である藥師佛であると考えられる。碑陰には二佛並坐像があり、碑  
陰の供養者肩書にも「釋迦像主」「多寶像主」とあるので、これが釋迦多寶佛であることは間違いない。阿難迦葉は  
釋迦佛の脇侍の羅漢であると考えられるので、これで願文中の佛はすべて尊像に比定できた。以上の願文中にみえる



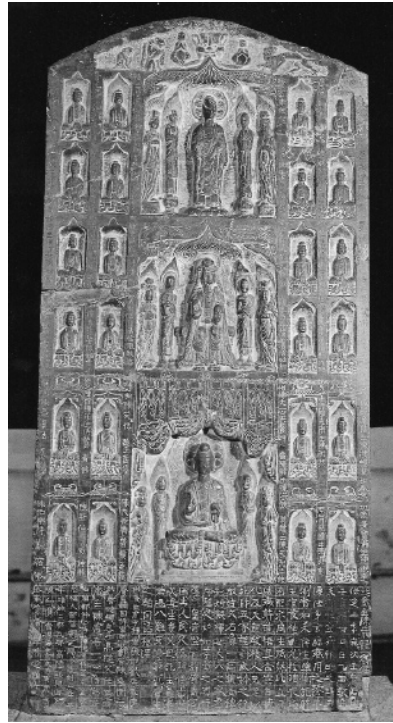
諸佛以外に、供養者肩書に「東方像主」、「南方像主」、「北方像主」、「西方像主」、「下方像主」、「上方像主」、「六佛都主」とある。碑陰の佛龕の下には六佛龕が横一列に並列されているので、この六佛が四方上下の六方佛を表していると考えられる。「六佛都主」というのはこの六方佛像すべてに出資した供養者の肩書であろう。董黃頭造像碑は、屬する王朝は異なるものの、彌勒、釋迦多寶、思惟、定光など、巨始光造像碑と題材が類似しており、當時よく知られていた佛名を多く用いたという共通點を有する。

⑧陳海龍造像碑 北周保定二年（五六二）圖一—

この碑については別稿において詳述したのでここでは概要のみを紹介しておきたい。現在太原の山西博物院に所藏されているが、もとは山西省南西部にあった。碑に刻まれた供養者は、像主である比丘尼法藏を始めとする比丘尼・沙彌尼約四十人、檀越主陳胤天を始めとする陳姓の者約七十人、その他雑多な姓の者各姓一〜三人で構成されている。碑の四面には、合計一百足らずの佛・菩薩名が供養者名とともに刻まれているが、その佛菩薩名のうち、三佛を除いた全てが『大通方廣經』より採用されている。『大通方廣經』は南朝の梁において諸大乘經典より抄撮して作成された三寶の禮拜・稱名による懺悔の功德を説く、當時相當の影響力を有した偽經であり、この經に基づいた懺悔行法が比丘尼法藏の主導のもと行われていたことを物語っている。

⑨陽阿故縣村合邑造像記 北齊河清二年（五六三）

この造像記については管見の限り拓本は見當たらず、『山右石刻叢編』にのみ銘文が著録されるが、その録文も缺



圖一一 陳海龍造像碑碑陽

賁妻周（下闕）」といった題記、さらに郡功曹、郡中正が數名その名を列ねていることから、郡レベルの大規模な邑義造像であったことがわかる。「・・妻・・」という記銘も多く、女性の比率が高いのも見逃せない。

この造像記で注目すべきは、十信・十住・十行・十廻向・十地の菩薩の階梯の名を冠した菩薩名がみえることである。顏娟英氏は『六十華嚴』と對照し、十地經等の思想に基づくと指摘されている<sup>(註)</sup>。顏氏は指摘されなかったが、この石刻には、「水精王」、「金輪王」、「銀輪王」、「銅輪王」という題記もある。『菩薩瓔珞本業經』によれば、「水精瓔珞」は妙覺、「金寶瓔珞」は十廻向、「銀寶瓔珞」は十行、「銅寶瓔珞」は十住に對應する。ゆえに、造像記全體の内容としては、さきに挙げた五十位に等覺・妙覺を加えた五十二位を一系列の菩薩の修行階梯として初めて體系化した『菩薩瓔珞本業經』に基づくものであると考えられる。この經は、『華嚴經』をもとにしたながらも、偽經である『梵網經』

北朝時代の多佛名石刻

落部分が多い。『鳳臺縣志』藝文によれば、碑はもと陽阿故縣（現在の山西省澤州縣）大陽鎮南河庵にあり、高さ一丈ほどあったという。この時代の邑義造像によくみられる「像主」、「邑子」の他、都邑主や都唯那にさらに「大」を冠した「大都邑主」、「大都唯那」、「大齋主」といった肩書を持つ供養者の名も刻まれる。中でも

「高都太守王法□妻張」や「高平令許僧

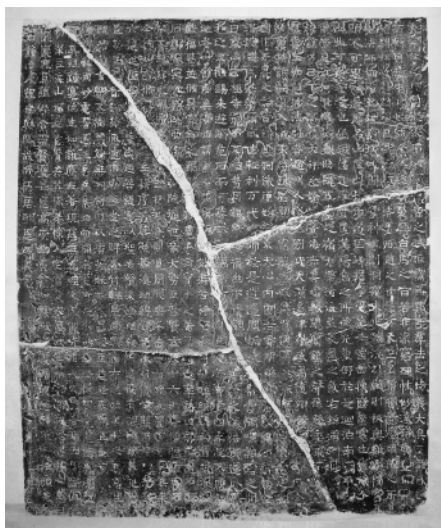
や『仁王般若經』の所説をうけて菩薩戒を説くものであり、船山徹氏の考證では、四八〇年～五〇〇年に南朝で成立した可能性が想定されている。<sup>83</sup> 石刻には、同經にみえる、十住・十行・十廻向・十地、第四十一地（等覺）の觀行や十信、十廻向、十地の義相を要約した文章も刻まれている。<sup>84</sup> さらに「懺悔主」や「道場主」といった肩書を持つ者もおり、この經が實際の現場でいかに用いられたかを示す極めて貴重な資料であるといえよう。特に住前の位である十信に菩薩名を冠しているのは興味深い。この造像記の内容についてはさらに詳しく検討する必要があるが別稿を期したい。

⑩玄極寺碑 北齊河清四年（五六五）圖一二

玄極寺碑に關しても管見の限り内容が詳しく紹介されたことはないようである。この碑はかつて河南省輝縣の白鹿山に存在したという。長文の銘文の middle には、以下のようにある。

至如慧據法師者、趙州人、俗姓劉氏。（中略）法師遂以魏□／和之末、擁錫來遊、躡危石而可尋、攀□梯而□坐。自迄大齊河清四年、足不履於土／地者卅餘載矣。每禪誦動心、至誠□□、能持苦行、降□自□、吐納□神、香甘流潤、□／能福慧竝脩、異空鉢之羅漢、□□群生、同寶手之菩薩、□適率諸四部、敬造石經□／石碑像、定光、釋迦、彌勒、□彌陀、觀世音、大勢至、普賢、文殊、十六王□像。．．．

この銘文によると、趙州の人である慧據法師が東魏興和<sup>85</sup>の末にこの山に來遊し、河清四年にいたるまで三十餘年間（二十餘年の誤りか）も籠山し禪誦し苦行していたが、小乗の羅漢とは異なり衆生を救う大乘の菩薩であるので、道を率いて石經ならびに石碑像を造ったという。尊名としては、定光、釋迦、彌勒という三世佛と、さらに普賢、文



圖一二 玄極寺碑

殊菩薩、十六王子というように、當時の代表的な佛菩薩ばかりであるが、造像に阿彌陀三尊の名が見え始めるのは、ちょうど北齊後半期頃であるので、この事例は初期の阿彌陀三尊造像の事例として注目される。

碑に名を刻む供養者は数多いが、主なものとしては、「大像主邑主齋主中散大夫張思顯、父荊州刺史蠡、母大施優婆姨王」、「安東將軍祕書丞梁州大中正榆縣開國男兼散騎常侍聘南使主皇甫亮」、「梁平西將軍永安縣開國侯天門郡太守朱豐國」などが見られる。皇甫亮は『北齊書』卷七武成帝紀河清三年（五六四）條に「夏四月辛卯、詔兼散騎常侍皇甫

亮使於陳」と、南朝の陳に使者として遣わされた記事が見える。北齊の造像であるにもかかわらず梁の將軍もその名を列ねていることも注目される。注意すべき供養者肩書としては、「像主道場主」、「像主行道主」、「禪師」、「法師」、「律師」などがみられる。法師・律師各三名に對して、禪師が七名みえるのは、この寺が禪定實踐が盛んであったことを物語っており興味深い。行道とは、佛像や佛塔など崇拜の對象の周圍を右遶する儀禮のことであり、例えば『大方等陀羅尼經』にもとづく方等懺などの懺悔儀禮にかかわるものとしても重視される。

⑪僧安道壹又はその關係者書丹の佛名 北齊・北周時代

北朝時代の多佛名石刻

僧安道壹は、『續高僧傳』にはその名を留めないものの、山東省西部、河北省太行山脈南部周邊において北齊・北周時代刻經事業を大きく展開した僧として近年研究者の注目を集めており、「大空王佛」の佛名石刻題記を各地に残していることでも有名である。特に彼の名が残されている洪頂山摩崖には經典や佛名などが多く刻まれている。この摩崖は一九九四年になってようやくはじめて報告され、それ以来内容の豊富さが注目を集めている。洪頂山摩崖は山東省の西部に位置する東平湖の北東岸の谷を挟んだ二峰の崖面に存在し、その谷の部分には寺院の址が存在するといふ。僧安道壹らによる佛名については桐谷征一氏や張總氏の貴重な研究成果があり、近年『文物』にもかなり詳細な報告が發表されたので、それらの先行研究に依りつつ紹介しよう。

洪頂山摩崖は、北齊時代、山東省・河北省において廣範圍で大規模に行われた僧安道壹主導の刻經事業の初期の遺跡として位置づけられる。この摩崖の北崖面には、一字の大きさが二メートル餘りもある特大の「大空王佛」といふ佛名が刻まれている。桐谷氏によれば、「大空王佛」は、洪頂山以外にも南北響堂山・徂徠山・尖山・雲翠山・書院山・鼓山・崗山などの各所にみられ、僧安道壹がかかわったことを示すシンボルマーク的役割を果たしているといふ。「空王佛」という名は經典にみられるものの、「大空王佛」としてはみられず、「空」觀の重要性を象徴化し佛名として創作されたものとされている。

その巨字「大空王佛」の東隣に東側から順に「式佛／維衛佛／式佛／隨葉佛／阿樓婆佛／阿那含牟尼佛／迦葉佛／釋迦牟尼佛／彌勒佛／阿彌陀佛／觀世音佛／大勢至佛／釋迦牟尼佛／具足千萬光相佛／安樂佛」といふ佛名と「主法鴻」といふ供養者名が刻まれる。このうち、冒頭の「式佛」と末尾の「釋迦牟尼佛」、「具足千萬光相佛」、「安樂佛」は字の大きさが他と異なり、当初は、維衛佛から釋迦牟尼佛までのいわゆる過去七佛、未來佛の彌勒佛、さらに阿彌

陀・觀音・勢至の阿彌陀三尊が刻まれていたと考えられている。「具足千萬光相佛」は、『法華經』勸持品にみえ、出家前の釋迦の妻であった耶輸陀羅が釋迦から授記を與えられ、未來に成佛する時の佛名である。「安樂佛」は、十二卷『佛名經』や、『現在賢劫千佛名經』などにみられる。

⑧ 「大空王佛」の西隣には「釋迦雙林後一千六百廿三年／大沙門僧安道壹書刊大空王佛七／・・・」という文があり、これらの佛名の書丹者が僧安道壹であることがわかる。「釋迦雙林後一千六百廿三年」というのが何年を指すのかについて、桐谷氏は南嶽慧思の『立誓願文』の末法説によつて北齊天保四年（五五三）年と結論されているが、北島信一氏は、北周宣政元年（五七八）とされる。北島氏の掲げる根據は、「大空王佛」の書體が洗練されており、特に佛の字の傍の縦畫の起筆部が手の形狀で裝飾されている形が後期に屬するものであり、「大沙門」という肩書は五七五年の尖山題記にみられること、「釋迦雙林後一千六百廿年」の紀年のある「安公之碑」について「安公」という稱呼や碑文の内容が彼の初期のものとは考えにくい、などである。『文物』の報告の指摘のとおり、東魏興和四年（五四二）造像銘には「如來隱變雙林以有一千六百兩十五年」とあるように、釋迦入滅の年代については諸説あり、現段階で結論を出すことは慎重にならざるを得ない。

また、既に舉げた佛名以外に、洪頂山の北崖には「高山佛」、「安王佛」、「大山巖佛」といった佛名がやはり大字で刻まれている。また書體が安道壹のものとは異なる「藥師琉璃光佛主」という佛名もみえる。桐谷・張兩氏ともに、「高山佛」、「大山巖佛」については、『佛名經』に山のつく類似した佛名があるものの、この摩崖の自然環境そのものの佛名化であり、「安王佛」、「安樂佛」は僧安道壹の名の佛名化であるとされる。

洪頂山以外で僧安道壹一派が関わったとされるところでは、陶山に「阿彌陀佛」、「觀世音佛」、「般若波羅蜜」の題

記があり、徂徠山には、「彌勒佛」、「阿彌陀佛」、「觀世音佛」、「大空王佛」の題記がある。また、河北の北響堂山石窟の窟外には、「大空王佛」、「无垢佛」、「寶火佛」の佛名題記がある。無垢佛と寶火佛は、『決定毘尼經』の三十五佛のうち、第七番目と第十一番目の佛である。字體が僧安道壹のものとはかなり異なるが、「彌勒佛」、「師子佛」、「明炎佛」の題記がある。この三佛は『現在賢劫千佛經』において、釋迦佛に次いで成道するとされる佛である。

以上の僧安道壹關係の佛名信仰についてまとめると、阿彌陀、觀音、彌勒などの同時代の代表的な佛に對する信仰がみられるものの、独自の佛教思想によつて佛名を創作し、特に「大空王佛」という現存經典には見えない佛名をその信仰の中核に据えているという點で、これまで見てきた石刻佛名と比較しても一際異彩を放つているといえよう。

⑫多佛名信仰に關するその他の注目すべき造像

上述した事例以外にも、注目すべきものは少なからずある。例えば、北魏延興二年（四七二）の紀年銘を有する書道博物館所藏の造像には「記書學生東郡黃□相爲亡父・・・黃盧頭、造釋迦牟尼百七十佛像。」とあり、西魏大統四年（五三八）の紀年を持つ山西省聞喜縣に存在した比丘尼智先・力佛族兄弟造像記には、「比丘尼智先少廁玄門、喪親道化、心遊玄原、神靖三昧、竝知李葉命等晞露、於鉢杖之餘、共佛弟子力佛族兄弟謹捨家財、仰爲衆父兄弟見在老親合家眷屬、造石像一百七十□。」とある。<sup>1)</sup> この百七十という數は『出三藏記集』卷四にみえる『稱揚百七十佛名經』に基づいたものであろう。同じく山西省に屬する汾陽縣田村定覺寺にあつたという田達等邑義八五人造像記<sup>2)</sup>（東魏武定七年（五四九））には「大魏武定七年四月八日造釋迦、觀世音、彌勒、并諸佛本師八十六□佛」とある。八十六という數は、法經等『衆經目錄』「衆經僞妄」にみえる『八方根原八十六佛名經』に基づいているとも考えられる。

佛名ではないが、多くの神王名を刻んでいるのが、山西省晉城の青蓮寺で発見された北齊乾明元年（五六〇）の紀年を有する比丘曇始造像石刻である。この石刻は、近年『文物』にその内容が発表されたが、筆者も既にそれをうけて考察を試みた。<sup>74</sup>この石刻には、『大方等陀羅尼經』の十二夢王名が經に説かれる夢相を表した線刻畫とともに刻まれ、供養者名肩書として「大齋主」がみえる。『大方等陀羅尼經』は懺悔行法をかなり具體的に説く經典であり、稱名信仰も表されており、やはりこの造像が懺悔儀禮と密接に關係していたことを示すであろう。天台の『方等三昧行法』や『國清百録』所收「方等懺法」などを参照すれば、そのことが確認できる。また、この『大方等陀羅尼經』が典據である十法王子と『法華經』序品の阿羅漢の名をとともに刻んだ造像も山東省臨朐縣にて発見されている。<sup>75</sup>

最後に隋代の石刻多佛名について少し言及しておきたい。隋代の多佛名石刻として知られているのは、寶山の大住聖窟<sup>76</sup>、房山雷音洞<sup>77</sup>、河北曲陽八會寺隋代刻經龕<sup>78</sup>などである。これらには、七佛、十方佛、二十五佛、三十五佛、五十三佛、賢劫千佛などの佛名が刻まれており、特に大住聖窟は、諸佛名を禮誦して自己の過罪を佛前に發露する懺悔思想が明確に表わされている。これら隋代の石刻佛名については既に指摘されているように三階教の七階佛名と極めて強い相関性がある。桐谷氏は、北朝摩崖佛名は、當時一般の釋迦・彌勒・阿彌陀など個別の佛菩薩名を讚揚すること否定せず、しかも必ずしも出典にはよらない佛名がみえるのに對し、隋代の佛名信仰には、嚴格に所説の經典をふまえ、普佛・多佛を徹底しようとする特徴があるとされる。<sup>79</sup>筆者も氏の意見に賛成であり、北朝時代の雜多な佛名信仰に對し、隋代のこれら佛名が整理統一されているという印象を強く受ける。

以上やや冗長になってしまった感はあるが、北朝時代の多佛名石刻の諸事例を紹介してきた。その特徴をいくつか指摘し、本節のまとめに代えたい。



一、地域別でみると、廣範圍にみられるが、特に山西・河南地方に多佛名を刻んだ造像碑が多くみられる。とりわけ山西は既に第一節で述べたように千佛造像碑の多さも際立っているので、造像と結びついた多佛名信仰が盛んであったことがわかる。

二、年代的には東西魏分裂以降増加する。これは北魏時代と比較して、民衆の佛教に對する理解が進み、また、教化僧がより高度な佛教儀禮を造像と關連づけて民衆に廣め始めたためであろう。特に北魏時代の單立の造像碑で多佛名を個別に列記したものは管見の限りみあたらない。

三、どのような佛を選択しているかについて、過去七佛、定光、多寶、釋迦、彌勒という過去、現在、未來の三世佛の系列と、他方佛である無量壽または阿彌陀佛と觀音・勢至菩薩、そして六方佛、十方佛、十六王子、つまり廣い意味での十方諸佛の系列とを組み合わせる三世十方佛を構成しているものが多い。ただし主要な佛以外に具體的に何佛の名を刻むかについては様々であり、務聖寺碑のように長い佛名を二佛に分けたり、嵩陽寺碑の六方佛や僧安道壹の事例のように現存經典にそのままでは見られない佛名を用いたりしている場合もある。つまり、佛の選擇について、必ずしも經典に嚴格に依據しようとする態度は見られず、かなり自由な選擇がなされていたと考えられる。

四、刻まれた佛・菩薩名が、『大通方廣經』、『菩薩瓔珞本業經』、『大方等陀羅尼經』といった實踐的性格が強く、特に懺悔と關わりの深い經典に基づいている場合がある。そういった造像はとりわけ山西地方に集中しており、宗教結社である邑義によるものである場合が多い。また、供養者肩書に「齋主」はよくみられ、さらに「懺悔主」、「行道主」といったものがみられるものもある。比丘・比丘尼の指導のもと、邑義において佛名を唱え禮拜・行道・懺悔し、時によっては菩薩戒を授けるといふ儀禮が行われていた可能性が高く、道俗がともに行う禮懺の實踐の様相を垣間見

ることができる。

五、多佛名の刻まれた単立の造像碑については、おしなべて、その造立に多人数が供養者としてかかわっており、第一節で述べたように、千人で千佛像を造立したという事例もある。そして、例えば「阿彌陀佛主董元士」といったように、各々の佛名に供養者名が付されるものが多い。一小佛龕の供養主として名が刻まれることは、供養者にとっても功德を積んだことをより具體的に実感できるであろうし、造像の主唱者側からみれば、寄付者を募るためには効果的な手段であったことと思われる。

#### おわりに

小論では未だ紹介されたことのないものを含め、多数の佛名にかかわる造像銘の事例を紹介しその佛名の典拠や配置のされ方について分析した。最後に本稿で明らかにしたことをまとめておきたい。

北朝時代の多佛名石刻は、東西魏分裂以降増加する。過去七佛、定光、多寶、釋迦、彌勒という三世佛の系列と、他方佛である無量壽または阿彌陀佛や觀音菩薩という當時の代表的な佛菩薩に對する信仰を中核としつつ、十方佛、十六王子、つまり広い意味での十方諸佛の系列を組み合わせて三世十方佛を構成しているものが多い。ただし、たとえ過去佛であったとしても現在への法の繼承を表すのではなく、その名號の禮拜・稱名によって現實に功德がもたらされると期待されていた。また、筆者が特に強調しておきたいのは、特定の佛を中心としつつも、それ以外の佛名が極めて種類豊富なことである。一つの石刻の佛名が多数の經典に基づいていたり、『大通方廣經』や『菩

『薩瓔珞本業經』などの中國撰述經典に基づくものもある。個々の佛名についても、嵩陽寺碑の北方佛のように現存經典には見えないもの、務聖寺碑の佛名のように經典の長い佛名を二分割し二佛名としたものさえあり、全體的に見ればかなり雑多かつ多種多様であるといえる。これは冒頭の經録にみる佛名關連の經の表でみたように、この時代に佛名に關する經典が多く撰述あるいは別の經典から抄出されていたという事實と符合するのであり、これらの經典に基づく佛名の稱名禮拜による懺悔儀禮の流行を示すものであるといえる。そして特に山西地方においてこうした儀禮が造像と結びついて盛んに行われたことがうかがえるのである。

曇鸞『淨土論註』卷二には、「菩薩之法常以晝三時夜三時禮十方一切諸佛、不必有願生意。今應當作願生意、故禮阿彌陀如來也。」[T40:835b]とある。菩薩の法が晝夜六時に十方一切諸佛を禮拜し、そこには必ずしも往生を願う意がないのに對し、阿彌陀佛を禮拜するというのは常に淨土往生を願うからであるとする。これは十方一切諸佛を禮するといふ北朝當時主流の大乗佛教に對し、淨土教独自の立場を示した言葉であるといえよう。

これに對し三階教は、一切佛を禮する普佛信仰を説くが、儀禮としては、七階佛名に基づき禮拜する佛名がかなりの程度固定されている。三階教の普佛信仰と、淨土教の阿彌陀佛信仰はしばしば對比され、兩者の間で激しい論争があったことも知られている。ただし、兩者はともに以上で述べ來たつた北朝時代の、主要な佛を信仰の中心としつつ三世十方佛を稱名・禮拜し懺悔するという、佛名に關してかなり自由な選擇がなされていた土壌において育まれたのである。主要な佛に集約するという方向を押し進めていけば阿彌陀佛信仰になり、逆の方向を極端にすると三階教の普佛思想になるだろう。しかし、ともに北朝時代の雑多な佛名を整理するという方向にある點では同じともいえよう。

(附記)淑徳大學書學文化センター藏拓本の閲覧に關して、同大學國際コミュニケーション學部准教授小川博章氏に、また、京都大學人文科學研究所藏拓本の閲覧については、同研究所准教授船山徹氏に多大な便宜をはかっていただいた。ここに謹んで感謝の意を申し上げたい。

【別表・表二の収録書名略稱】

彙録 劉景龍・李玉昆（主編）『龍門石窟碑刻題記彙録』中國大百科全書出版社、一九九八年。題記序號。

雲岡 水野清一・長廣敏雄（共著）『雲岡石窟——西曆五世紀における中國北部佛教窟院の考古學的調査報告』京

都大學人文科學研究所雲岡刊行會、一九五二—一九七五年。卷數・頁數。

大村 大村西崖『支那美術史彫塑篇』佛書刊行會圖像部、一九一五年。頁數。

魏目 佛教拓片研讀小組（編）『中央研究院歷史語言研究所藏北魏紀年佛教石刻拓本目錄』中央研究院歷史語言研

究所 二〇〇二年。序號。

京 京都大學人文科學研究所藏石刻拓本資料（ウェブサイト名）。

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/dl-machine/imgsrvtakuhon/> 管理番號（ファイルナンバー）。

瓊 陸增祥『八瓊室金石補正』。卷數。

山右 胡聘之『山右石刻叢編』。卷數。

萃 王昶『金石萃編』。卷數。

水泉 劉景龍・趙會軍（編著）『偃師水泉石窟』文物出版社、二〇〇六年。頁數。

拓 北京圖書館金石組(編)『北京圖書館藏歷代石刻拓本匯編』中州古籍出版社、一九八九年。卷數(上一桁)

+頁數(下三桁)。

百品 顏娟英(主編)『北朝佛教石刻拓片百品』中央研究院歷史語言研究所、二〇〇八年。頁數。

松原 松原三郎『中國佛教彫刻史論』吉川弘文館、一九九五年 圖版NO.。

魯 北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館(編)『魯迅輯校石刻手稿』上海書畫出版社 一九八七年。帙・冊・頁數。

【圖版典據】

圖一・甘肅省文物工作隊・炳靈寺文物保管所(編)『中國石窟 炳靈寺石窟』平凡社、一九八六年。圖二・張寶璽「建弘題記及其有關問題的考釋」『敦煌研究』一九九二一。圖三・雲岡石窟文物保管所(編)『中國石窟 雲岡石窟』二、平凡社、一九九〇年。圖四・劉景龍・趙會軍(編著)『偃師水泉石窟』文物出版社、二〇〇六年。圖五・六・七・八・九・京都大學人文科學研究所藏拓 NANO373A-0373AB-0374X-0418A。圖一〇・王樹新(主編)『高平金石志』中華書局、二〇〇四年。圖一一・林樹中(主編)『中國美術全集』彫塑編三、人民美術出版社、一九八八年。圖一二・淑德大學書學文化センター藏拓、筆者撮影。

1 井ノ口泰淳「燉煌本佛名經の諸系統」『東方學報』三五別冊、一九六四年、鹽入良道「中國佛教における佛名經の性格とその源流」『東洋文化研究所紀要』四二、一九六六年、同「中國佛教に於ける禮懺と佛名經典」結城教授頌壽記念論文集刊行會(編)『結城教授頌壽記念——佛教思想史論集』大藏出版、一九六四年(のち『中國佛教における懺法の成立』大正大學天台學研究室、

- 二〇〇七年に所収)、落合俊典(編)『中國撰述經典(其之三)』(七寺古逸經典研究叢書第三卷) 大東出版社、一九九五年。
- 2 前掲注鹽入良道『中國佛教における懺法の成立』二六一～二六五頁。
- 3 なお佛名經典の定義は前掲注井ノ口氏論考の注一に依據する。
- 4 賀世哲『敦煌圖像研究——十六國北朝卷』甘肅教育出版社、二〇〇六年、梁曉鵬『敦煌莫高窟千佛圖像研究』民族出版社、二〇〇六年。
- 5 前掲注鹽入良道『中國佛教における懺法の成立』。
- 6 「憐愍一切衆生故、即稱七佛名字。第一維衛佛、第二維式佛、第三隨葉佛、第四拘樓秦佛、第五句那含牟尼佛、第六迦葉佛、第七釋迦牟尼佛。一切衆生若在病困中、若在困厄中、若在大火中、山谷虎狼中、若在險路賊盜中、若在河厄難中、常常誦七佛名字、悉皆消滅。」[T85:1363c]。
- 7 「佛即舉七佛名字。第一維衛佛、第二式佛、第三隨葉佛、第四拘樓秦佛、第五拘那含牟尼佛、第六迦葉佛、第七釋迦牟尼佛。若有苦厄病痛者、便當讀誦此七佛名字。」[T85:1325b]。
- 8 「佛告諸疾人、吾教汝、但當至心百日之中請大德法師治齋、日日禮七佛名字、日日禮金剛密迹、日日禮無量壽佛、一日之中造成一卷救疾經、百日之中行道懺悔、百卷成就、作濟度經、可免此宿殃患耳。」[T85:1362c]。
- 9 『治禪病祕要法』卷二「鬼爲亂時、應當數息、極令閑靜。應當至心念過去七佛、稱彼佛名、南無毘婆尸佛、尸棄佛、提舍佛、鳩樓孫佛、迦那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛。稱彼佛名已、應當憶持一切音聲陀羅尼。即說呪曰、(中略)。若有亂心爲埠惕鬼所惑亂者、或作種種諸幻境界、應當誦持此陀羅尼、七佛名字、彌勒菩薩、一心數息、誦波羅提木叉、經一百遍、此諸惡鬼、各各調伏、終不惱亂行道四衆。」[T15:341c]。
- 10 卷二「佛告阿難、若有善男子善女人、修行此經者、若眼見無量壽佛、釋迦牟尼佛、維衛佛、式佛、隨葉佛、拘樓秦佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、過去雷音王佛、祕法藏佛、是諸佛前至心懺悔、當滅九十二億生死之罪。」[T21:650c]。

- 11 『決定毘尼經』卷一「若有菩薩成就五無間罪、犯於女人、或犯男子、或故犯、犯塔、犯僧、如是等餘犯、菩薩應當三十五佛邊所犯重罪晝夜獨處至心懺悔。」[T12:39c]、「如是舍利弗、菩薩如是觀此三十五佛如在目前、思惟如來所有功德、應作如是清淨懺悔。菩薩若能淨此罪已、爾時諸佛爲其現身、爲度衆生亦說種種諸行。」[T12:39ab]。
- 12 『觀虛空藏菩薩經』「世尊大慈弘誓無量不捨一切、於深功德經說治罪法。名決定毘尼。有三十五佛救世大悲。汝當敬禮。汝敬禮時當著慙愧衣、如眼生瘡深生愧恥、如癩病人隨良醫教、汝亦如是應生慙愧。既慙愧已、一日乃至七日禮十方佛、稱三十五佛名、別稱大悲、虛空藏菩薩名。」[T13:677b]。
- 13 『治禪病祕要法』卷一「治之法者、向諸智者至誠至說、懺悔所作惡不善業。智者應當教此比丘念釋迦牟尼佛、乃至次第、念於七佛。念七佛已、念三十五佛。然後復當念諸菩薩、念大乘心、觀於空法、深自慙愧、想一一佛。」[T15:337a]。
- 14 『觀藥王藥上二菩薩經』「若有善男子善女人及餘一切衆生得聞是五十三佛名者、是人於百千萬億阿僧祇劫不墮惡道。若復有人能稱是五十三佛名者、生生之處常得值遇十方諸佛。若復有人能至心敬禮五十三佛者、除滅四重五逆及謗方等皆悉清淨。」[T20:664a]。
- 15 「爾時釋迦牟尼佛告大衆言、我曾往昔無數劫時、於妙光佛末法之中、出家學道、聞是五十三佛名。聞已合掌、心生歡喜。復教他人令得聞持。他人聞已、展轉相教、乃至三千人。此三千人異口同音稱諸佛名、一心敬禮。以是敬禮諸佛因緣功德力故、即得超越無數億劫生死之罪。其千人者花光佛爲首、下至毘舍浮佛、於莊嚴劫得成爲佛、過去千佛是也。此中千佛者、拘留孫佛爲首、下至樓至如來、於賢劫中次第成佛。後千佛者、日光如來爲首、下至須彌相、於星宿劫中當得成佛。佛告寶積、十方現在諸佛善德如來等、亦曾得聞是五十三佛名故、於十方面各皆成佛。」[T20:664a]。
- 16 「若有衆生欲得除滅四重禁罪、欲得懺悔五逆十惡、欲得除滅無根謗法極重之罪、當勤誦上藥王藥上二菩薩呪、亦當敬禮上十方佛、復當敬禮過去七佛、復當敬禮五十三佛、亦當敬禮賢劫千佛、復當敬禮三十五佛。然後遍禮十方無量一切諸佛。」[T20:664ab]。
- 17 『續高僧傳』卷二六(仁壽)四年建塔。又送于隆州禪寂寺。初至設齋、忽有野鹿、從南山下、度嘉陵江、直趨塔所。人以手摩、

- 自然依附。乃至下訖、其鹿方去。夜放大光在佛堂上。・・・重還京室。改革前度、專修禪悔。晝夜十有二時、禮五十三佛。餘則加坐正念。畢世終業。」〔F50:669ab〕。
- 18 『續高僧傳』卷二〇「至開皇初方興佛法、雲門受具、時年二十三。又於武陽律師所聽始半夏、見五色光如車輪照於心上。衆竝同見。即於光中禮五十三佛、猶未滅、更禮三十五佛、光乃收隱。」〔F50:601c〕。
- 19 高峽（主編）『西安碑林全集』廣東經濟出版社、一九九九年、一〇五卷五五頁。
- 20 前掲注『西安碑林全集』一〇五卷七九頁。
- 21 『拓』三卷一三七頁。
- 22 『松原』一八三b。
- 23 この經典の成立に關しては、山口正晃「現在十方千五百佛名竝雜佛同號」小考——「佛名經類」の發展過程と關連して」『敦煌寫本研究年報』二、二〇〇八年參照。
- 24 「(前略) 吾不避遠近、□□／勒佛一心敬禮、稱十方諸佛一心。牟尼佛白□／稱世尊一心禮拜稽首和南言、(後略)」(敦煌研究院〇〇〇七號)。王惠民「北魏佛教傳帖原件『大慈如來告疏』研究」『敦煌研究』一九九八一、溫玉成「『大慈如來告疏』研究」『佛學研究』二〇〇三年參照。
- 25 『南史』卷七・梁本紀中・大同元年條「壬戌、幸同泰寺、鑄十方銀像、并設無碍會。」大同三年條「夏五月癸未、幸同泰寺、鑄十方金銅像、設無碍法會。」
- 26 山西博物院所藏衛超王造像碑(山西省博物館(編)『山西省博物館藏文物精華』山西人民出版社、一九九九年、一五八頁)。
- 27 山東省博物館所藏的張疵造像記(『拓』七卷八三頁)に「敬造十方釋迦像十軀」とある。これは『觀普賢菩薩行法經』卷一の「汝今應當觀大乘因。大乘因者諸法實相。是聞是語已、五體投地、復更懺悔。既懺悔已、當作是語、『南無釋迦牟尼佛、南無多寶佛塔、南無十方釋迦牟尼佛分身諸佛』。作是語已、遍禮十方佛、『南無東方善德佛、及分身諸佛』。如眼所見、一一心禮、香華



供養。供養畢已、胡跪合掌、以種種偈讚歎諸佛。既讚歎已、說十惡業懺悔諸罪。」[T9:392b] という箇所との關連が考えられ、十方佛の稱名禮拜による懺悔が行われていたことを想像させる。

28 邑義とは造像などを契機として結成された民間の宗教結社である。關中の邑義について、筆者は「北朝造像銘にみる道佛二教の關係——關中における邑義の分析を中心に」『東方宗教』一〇九、二〇〇七年にて初步的分析を行った。

29 「高嶺以東諸村邑儀道俗造象記」に「肆州永安郡定襄縣高嶺以東諸村邑義道俗等、敬白十方諸佛、一切賢聖、過□□善、生遭季運、前不值釋迦初興、後未遭彌勒三會、二聖中間、日有□歎」とある（『魯』第二帙第二冊四六五頁）。

30 張總「白佛山等十六王子像概述」『敦煌研究』一九八八—三、賴文英「六世紀中國華北地區的法華「十六王子」信仰」『圓光佛學學報』一〇、二〇〇六年。

31 例えば『隋書』經籍志に、「天地之外、四維上下、更有天地、亦無終極、然皆有成有敗。一成一敗、謂之一劫。自此天地已前、則有無量劫矣。每劫必有諸佛得道、出世教化、其數不同。今此劫中、當有千佛。自初至于釋迦、已七佛矣。其次當有彌勒出世、必經三會、演說法藏、開度衆生。」とある。他には、「大品般若經」卷二「南西北方四維上下亦如是、各千佛現。」[T8:310a] のように、十方それぞれに千佛が現れるとするものなどもある。

32 『維摩詰所說經』法供養品「過去無量阿僧祇劫、時世有佛、號曰藥王如來。（中略）是時有轉輪聖王、名曰寶蓋、（中略）時王寶蓋豈異人乎。今現得佛、號寶蓋如來。其王千子、即賢劫中千佛是也。從迦羅鳩孫馱爲始得佛、最後如來號曰樓至。月蓋比丘、即我身是。」[T14:556b-557a]。

33 『高僧傳』卷二、超辯傳 [T50:408b]。

34 『續高僧傳』卷八、僧範傳 [T50:484a]。

35 『高僧傳』卷五、竺道壹傳 [T50:357b]。

36 『續高僧傳』卷二九、德美傳 [T50:697a]。

- 37 『續高僧傳』卷一五、慧聰傳 [T50:663a]。
- 38 張寶璽「建弘題記及其有關問題的考釋」『敦煌研究』一九九二—一、賴鵬舉『絲路佛教的圖像與禪法』圓光佛學研究所、二〇〇二年。
- 39 「志」は「至」に通ず。
- 40 張寶璽前掲注論考参照。
- 41 なお石松日奈子、賴鵬舉兩氏ともに發願文にみえる「請妙匠、容茲尊像」の「茲」の字を「慈」とされる。賴氏は無量壽佛が本尊であるとするが、石松氏はこの文を「慈尊」＝彌勒像を造ったことを表すとし、この願文を無量壽佛の題記として考えることに疑問を呈しておられる（『北魏佛教造像史の研究』ブリュッケ、二〇〇五年、四五頁）。ただし、『中國石窟 炳靈寺石窟』平凡社、一九八六年の圖版二八の文字を見ると明らかに「茲」であり、さらにつづく文に「畫作慈氏」（賴鵬舉氏は「畫」を「量」につくるが、字形・意味ともに「畫」の方がよい）と彌勒を造ったのではなく、「畫」いたことを後に附加して言っているものであるから、ここは「茲の尊像を容どらしむ」と讀むべきであり、「茲尊像」とは塑像である本尊の無量壽像のことであり、「慈氏」というのは、塑像の本尊とは別の「彌勒菩薩」と題記のある畫像を指すとも考えられよう。
- 42 『偃師水泉石窟』二七頁録文では大魏太和拾□年とあるが□は「參」と讀める。
- 43 この五縣内の合計三六〇一六という數は、銅像三區を除き華勝佛を五百として上記の數を足せば合致する。
- 44 鹽入良道「慈悲道場懺法の成立」（『中國佛教における懺法の成立』大正大學天台學研究室、二〇〇七年 所收）、聖凱法師『梁皇懺』及其作者辨析』『中國佛教懺法研究』宗教文化出版社、二〇〇四年 所收）。また、船山徹氏によると、『淨住子』の唐の道宣による統略本成立以前の『淨住子』の原本の文章表現が一部取り込まれている蓋然性が高いとされる。同氏『南齊・竟陵文宣王蕭子良撰『淨住子』の譯注作成を中心とする中國六朝佛教史の基礎的研究』平成十五〜十七年度科硯費報告書、二〇〇六年を参照。

- 45 造像銘にあらわれる「天宮」とは、張總氏の説によれば「塔」とほぼ同義で、地上の屋敷を模して造られ、中に尊像などを安置するとされる。この銘文の場合、「天宮」の中に白玉像を安置したのであろう。詳しくは、張總「天宮造像探析」『藝術史研究』一、一九九九年を参照。
- 46 『魯』第一函第五冊八一七頁。
- 47 龍自在王佛は、『六十華嚴』では東南方の香雲莊嚴幢世界の佛とされ、『千佛因縁經』では、華光國土の佛とされるなど經典により異なる。
- 48 『普賢菩薩說證明經』に關して、この經名は隋の『法經錄』に初出である。菊地章太氏はこの經が「閻浮履」という譯語を使用しており、これは闍那崛多が初めて使用した語という事實を勘案して五六〇～五九四年成立とされている（菊地章太「彌勒信仰のアジア」大修館書店、二〇〇三年、一一六頁）。そうであるとするこの造像碑がこの經を参照できないことになる。しかし、「閻浮履」と音通である「閻浮利」という語は諸經に頻出し、闍那崛多の譯經でも「閻浮履」は一箇所にしが使われておらず、「閻浮提」の方を多用している。ところで、梁初成立の『大通方廣經』卷上の現在佛には、「十億王明諸佛」から「師子億像」まで、さらに一佛を挟んで、「普光功德山王」、「善住功德寶王」とあり、『普賢菩薩說證明經』の佛名にほぼ一致する。一方が他方を参照したのは明らかである。『大通方廣經』の佛名は、筆者の調査によると、大部分が他の經典の佛名からの借用であり、他の經典でこの佛名の配列は見当たらないので、『普賢菩薩說證明經』が『大通方廣經』を参照した可能性よりも、その逆である可能性の方が高い。よって『普賢菩薩說證明經』の成立時期は『大通方廣經』成立（梁初）以前に遡る可能性が高いということができよう。ただし現存するテキストが成立當時そのままの形であるかどうかはまた別に検討する必要がある。『大通方廣經』の成立問題については拙稿「南北朝時代における『大通方廣經』の成立と受容——同經石刻佛名の新發見」『中國哲學研究』二三、二〇〇八年参照。
- 49 『中國文化史蹟』第二卷六〇頁。

- 50 『大通方廣經』の佛名に關しては、前掲注拙稿「南北朝時代における『大通方廣經』の成立と受容」参照。
- 51 例えば後述する洪頂山摩崖にも「觀世音佛」がみられる。
- 52 周錚「西魏巨始光造像碑考釋」『中國歷史博物館館刊』一九八五—一七。
- 53 經律論に通じた高僧の尊稱として三藏という語が通例用いられるが、國三藏や州三藏は、西魏・北周王朝においては朝廷が任命する僧官であったことは、山崎宏「南北朝時代に於ける僧官の檢討」(『支那中世佛教の展開』清水書店、一九四二年 所收)、會田大輔「北周「張僧妙碑」からみた宇文護執政期の佛教政策」(氣賀澤保規(編)『中國石刻資料とその社會——北朝隋唐期を中心に——』汲古書院、二〇〇七年 所收)を参照。兩氏とも郡三藏や縣三藏の存在については指摘されていないが、北周保定元年(五六一)の紀年銘を有する「延壽公碑」(藤原楚水『增訂寶字貞石圖』第二卷二二四—二二五頁に拓影あり)の碑陰には、「州三藏法師」、「郡三藏法師」、「縣三藏法師」、さらに「郡三藏律師」や「郡三藏禪師」という肩書を持つ僧名が列記される。北周において、國三藏や州三藏の存在は確認されてきたが、その下の郡や縣にまで三藏が存在することはこれまで知られていなかった。巨始光碑や延壽公碑は、これらの存在を明らかにした點で極めて貴重な資料である。ちなみに、延壽公碑には、「高涼縣三藏法師」として「惠」、「賢」、「明」の名が見える。「賢」とこの巨始光碑にみえる「辯賢」は同一人物である可能性が高い。
- 54 板授については、大庭脩「魏晉南北朝告身雜考——木から紙へ」『史林』四七一—、一九六四年、佐藤智水「華北石刻史料の調査——南北朝時代の造像史料から」『唐代史研究』七、二〇〇四年を参照。
- 55 東西魏の攻防については毛漢光『中國中古政治史論』聯經出版、一九九〇年、宋傑『兩魏周齊戰爭中的河東』中國社會科學出版社、二〇〇六年に詳しい。大統四年(五三八)王思政が築いた玉壁城は、高涼縣に屬し、王思政の後、名將韋孝寬がここを守り、東魏の進攻を何度も防いだ難攻不落の城として有名である。
- 56 『新序』雜事第五「葉公子高好龍、鉤以寫龍、鑿以寫龍、屋室雕文以寫龍、於是夫龍聞而下之、窺頭於牖、拖尾於堂、葉公見

之、棄而還走、失其魂魄、五色無主、是葉公非好龍也、好夫似龍而非龍者也。」これは、本當の龍が好きなのではなく龍に似て龍に非ざるものが好きだったという逸話であるが、造像願文においては話の重點が異なっている。

57 この逸話に關しては、例えば、『集神州三寶感通錄』卷二に「案『佛遊天竺記』及雙卷『優填王經』云、佛上切利天、一夏爲母說法。王臣思見、優填國王遣三十二匠、及齋梅檀、請大目連神力運往令圖佛相。」〔FS2.419b〕とあるのを参照。

58 「補」は「布」に通ず。

59 李靜傑「中國北朝期における定光佛授記本生圖の二種の造形について」『美學美術史研究論集』一七・一八、二〇〇〇年を參照。

60 前掲注拙稿「南北朝時代における『大通方廣經』の成立と受容」參照。

61 顏娟英「北朝華嚴經造像的省思」（邢義田（主編）『中世紀以前的地域文化・宗教與藝術』中央研究院歷史語言所、二〇〇二年所収）。

62 望月信亨『淨土教の起源及發達』共立社、一九三〇年、一八四～一九六頁、改訂版『佛教經典成立史論』法藏館、一九四六年、四七一～四八四頁。

63 船山徹「疑經『梵網經』成立の諸問題」『佛教史學研究』三九―一、一九九六年。

64 一例を示すと、十廻向の第六の義相について「菩薩本業瓔珞經」本文が「習行相善無漏善而不二故。名隨順平等善根迴向。」に對し、石刻は「習心向善无漏善不二、名隨順善。」である。

65 文中の「巍□和」について、年數から考えて、和のつく該當する年號は「興和」しかない。

66 桐谷征一「北朝摩崖刻經と經文の簡約化——選擇から結要へ」『大崎學報』一五七、二〇〇一年、張總「山東碑崖刻經經義内涵索探」『北朝摩崖刻經研究（續）』天馬圖書有限公司、二〇〇二年。

67 山東省博物館・Heidelberg Akademie der Wissenschaften・中國社會科學院世界宗教研究所「山東東平洪頂山摩崖刻經考察」

- 『文物』二〇〇六一—二。
- 68 末尾の「七」が意味するのは、張總氏の指摘するように「大空王佛」を七處に刻んだということではなく、おそらく次に「佛がつづき、「七佛」ではないだろうか。
- 69 北島信一「彩色石壁摩崖刻經論及其年代考」(焦德森(主編)『北朝摩崖刻經研究』三、内蒙古人民出版社、二〇〇六年)。
- 70 『松原』四五a。
- 71 『聞喜縣志』卷二〇下。
- 72 王培昌(原著)・郝勝芳(主編)『汾陽縣金石類編』山西古籍出版社、二〇〇〇年、七四頁。
- 73 劉建軍「『大方等陀羅尼經』的<sup>十二</sup>夢王<sup>石</sup>刻圖像」『文物』二〇〇七—一〇。
- 74 拙稿「北朝時代における方等懺と好相行——『大方等陀羅尼經』十二夢王石刻圖像の新發見とその意義」『佛教文化研究論集』一二、二〇〇八年。
- 75 この造像についても前掲注拙稿「北朝時代における方等懺と好相行」を参照。
- 76 李玉珉「寶山大住聖窟初探」『故宮學術季刊』一六一—二、一九九八年、河南省古代建築保護研究所(編)『寶山靈泉寺』河南人民出版社、一九九二年。
- 77 塚本善隆「石經山雲居寺と石刻大藏經」『東方學報』京都 第五册副刊、一九三五年。桐谷征一「房山雷音洞石經攷」『野村耀昌博士古稀記念論集——佛教史佛教學論集』春秋社、一九八四年。
- 78 劉建華「河北曲陽八會寺隋代刻經龕」『文物』一九九五一—五。
- 79 前掲注塚本善隆「石經山雲居寺と石刻大藏經」。
- 80 前掲注桐谷征一「北朝摩崖刻經と經文の簡約化」。

別表 多佛名造像銘目録

番号	紀年	月日	王朝	名稱	主な収録書	佛・菩薩名	關係地・所藏
①	420	0324	西秦	大禪師曇摩毗等造像記	『中國石窟 炳靈寺石窟』圖21-28、頼鵬舉『絲路佛教の圖像與禪法』154	無量壽佛 得大勢志(至)菩薩 觀世音菩薩、彌勒菩薩 釋迦牟尼佛 藥王佛、十方佛(『六十華嚴』)	炳靈寺石窟第169窟北壁(甘肅省蘭州市)
②	483	0830	北魏	邑義信士女等54人造像記	拓3014、雲岡9.49;11.31、魏目8	文殊師利菩薩・大勢至菩薩・觀世音菩薩(他に彌勒、釋迦多寶、三十五、五十三佛などが形状より推測される。)	雲岡石窟第11窟東壁上(山西省大同市)
③ a			北魏	比丘曇覆摩崖造像碑	水泉27;40;41、文物1990.3.72	十六王子行像、千佛天宮、千五百龍華像、五千佛堂、華勝佛	水泉石窟窟外(河南省偃師市)
③ b	534	0615	北魏	比丘尼仙造像記	文物1990.3.72、水泉30;88	七佛、釋迦多寶佛、定光佛、大慈大悲佛、日月光明佛、彌勒[佛]、虛空藏菩薩、十[方]大地菩薩	水泉石窟(河南省偃師市)
④	535	0408	東魏	嵩陽寺碑	拓6028、京 NAN 0375A.D、百品85、魯一五817、萃30	七佛、彌勒、三十五佛、五十三佛、龍自在王佛、西方殊勝正覺佛、北方寶願神金?佛、下方師子尊教佛、上方□□如來佛、南方□□佛刈?佛、東方寶海佛	中岳嵩陽寺(河南省登封市)嵩陽書院現藏
⑤	535	0411	東魏	務聖寺碑(張法壽息榮遷等造像記)	京 NAN0373AB;0374X;0378X、百品87、萃30、瓊17、魯二二241、大村252	釋迦文佛、觀音、文殊、無量壽佛(以上願文)『金光明經』功德天品、『法華經』授記品の諸佛、十六王子、大通智勝佛など。詳しくは表三参照。	原在少林寺那羅王殿内(河南省登封市)
⑥	540	0715	西魏	巨始光造像碑	百品104、魯二三529、大村289	釋迦多寶佛、七佛、十六王子、維摩文殊、定光佛、思惟菩薩	稷山縣出土(山西省南西部)中國國家博物館所藏
⑦	558	0727	北齊	董黃頭造像碑	百品167、『高平金石志』155;156圖34、『道端良秀著作集』5.168	釋迦、彌勒、無量壽、藥師、定光、思惟、多寶、阿難、迦葉、諸菩薩、六(方)佛	原在高平市鞏村大廟(山西省南東部)高平市文博館所藏
⑧	562	0124	北周	陳海龍(比丘尼法藏等)造像碑	松原320/321ab、百品200	『大通方廣經』卷上の諸佛菩薩名、梵王佛、須彌燈佛、金光明佛	安邑縣出土(山西省南西部)山西博物院所藏
⑨	563	0500	北齊	陽阿故縣村造像碑	山石2	『菩薩瓔珞本業經』の菩薩・王名	原在山西鳳臺縣陽阿故縣村
⑩	565	0408	北齊	玄極寺碑	魯一六1023	定光、釋迦、彌勒、阿彌陀、觀世音、大勢至、普賢、文殊、十六王子	原在河南輝縣白鹿山
⑪			北齊	僧安道壹又はその關係者書丹佛名	文物2006.12.79	七佛、彌勒佛、阿彌陀佛、觀世音佛、大勢至佛、釋迦牟尼佛、具足千萬光相佛、安樂佛、安王佛、大山巖佛、高山佛、大空王佛、藥師瑠璃光佛	洪頂山摩崖(山東省東平縣)